都名所圖會 三

内閣文庫
和書 類
八八七三 號
一一 冊
一七三函 一四 架

禮

内閣文庫
番號 和 8873
冊數 11（2）
函號 172 178

息齋隠

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

制度取調

都名所圖會巻之二目録

平安城尾

官者殿糺
大雲院
座頭積塔
宮川 鴨川の末
六波羅蜜寺
愛宕寺
五條橋
塩竈井
太子堂
萬年寺天満宮
橘行平卿塚

祇園御旅所
祇園會鉾留
四条河原夕涼
建仁禅寺
姿見の池
晴明社
首途八幡
本覺寺
新善光寺
竹林院
市中山金光寺

四條道場金蓮寺
同山鉾圖
同芝居
蛭子社
阿古屋塚
十禅寺社
御影堂
塩竈山上徳寺
蓮光寺
鬼頭天皇
延壽寺

十住心院 深くて地藏
手洗水圖
目疾地藏
六道珍皇寺
焔魔堂
若宮八幡
澆の池
塩竈社
長講堂
等善寺
夕顔塚

国立公文書館 National Archives of Japan

籬の池
佛光寺
因幡薬師
諏訪社
一音寺
新住吉
天道社
本圀寺 加藤清正墳
古醒井
東殿
成真寺
芹根水
道祖神
春日森
古井社
三鈷松
六孫王社
福大明神森

藍染川
神明宮
繁昌社
新玉津嶋社
壬生寺
荒神社
御太刀松
人丸社
興正寺
松明殿
判官塚
月見橋
稲荷御旅所
古御旅
清盛旧地
松子坊松
誕生水
人丸塚

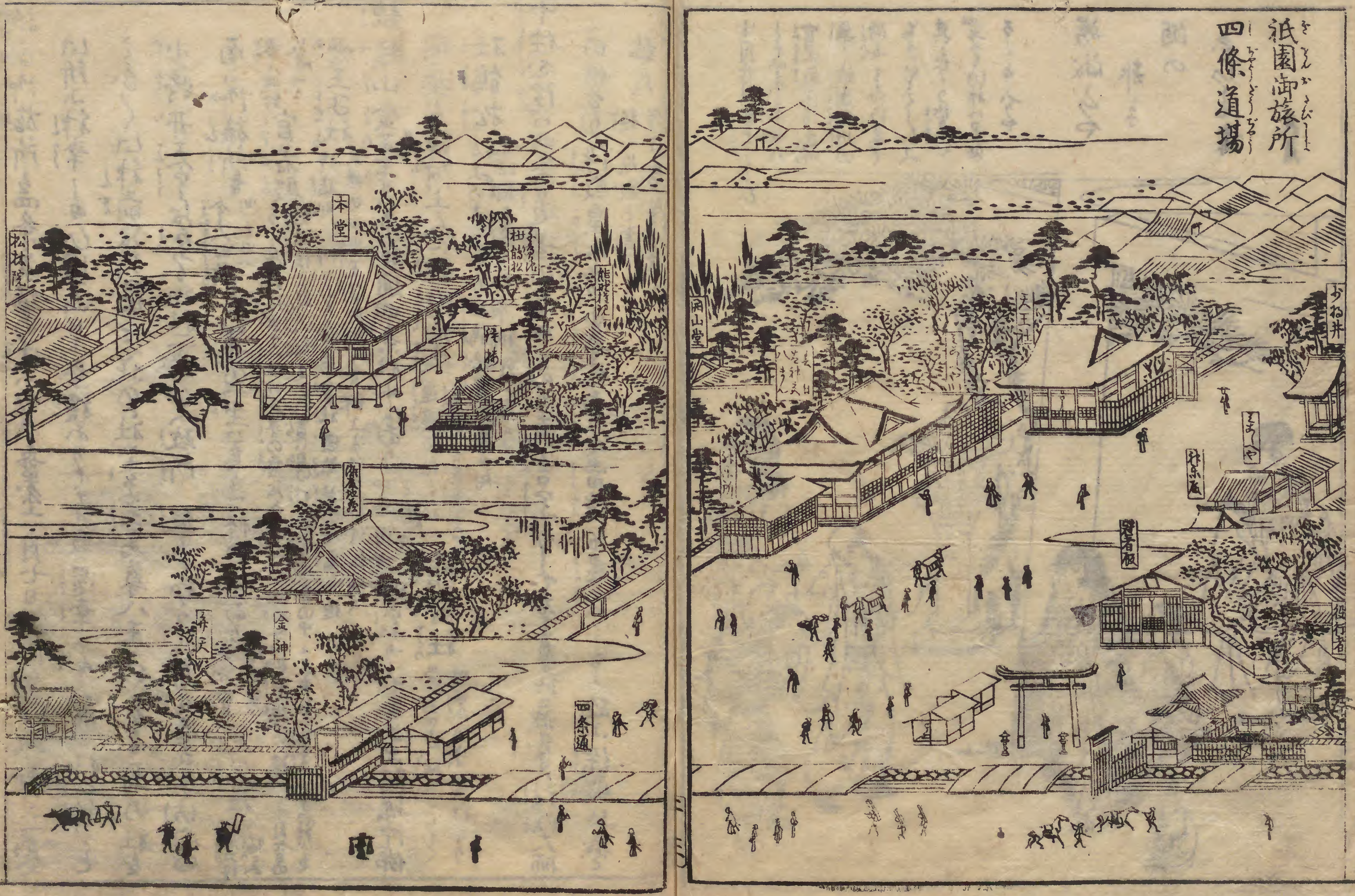
花園稲荷社
大原社
朝日宮
菅大臣社
同社之図
化粧水
石上宮
醒井
常楽寺
稲荷祭礼図
宇賀社
稲荷社
蔵王森
宗守長老
住吉社
羅生門旧跡
満仲公誕生地
嶋原傾城町

俊成卿社
白天神
神明宮
五条天神宮
蛭子森
杉坂子
萬壽寺
西本願寺
東本願寺
金光寺
籔内紹智家
不動堂
寛算石
粟嶋社
東寺
大通寺
歓喜森

十月廿日ハ誓文ばらひとて四条京極の官者殿に詣て群集し祇園鴨川の傾城もきたり来てちらひをそらふ又其夜より誓文を立るも此神ハそれゆゑしかるや

偽らや
都は
酒の
ゑひても謙

其角


祇園御旅所
四條道場
本堂
松林院
金神
弁天
四条通
開山堂
天王社

大雲院

祇園御旅所ハ四条京極の辻にあり毎年六月七日祇園會の神輿こゝに來此所に神幸し又ハ十四日に祭禮ありて本殿へ還幸し給ふ両日ともに鉾をとゞむ此神前を引渡す北の社ハ素戔烏尊八王子をまつる南の社は少将井天王をまつる初れ一坐ハ大政所 號してむかしハ烏丸通五条坊門の南に御旅所有 今大政所町といふ 少将井の一坐ハ烏丸二條の北にあり 今少将井町といふ

官者殿 春日明神 素戔烏の所神社世に土佐坊正尊の霊をまつるといふ今ハ然らず蛭子講の頃人群集す十月廿日の神にて素戔烏尊の中にましまして猿田彦也

悪王子社 御旅町の側にあり祇園會神輿臨幸の時烏丸通又條の小悪王子町より古跡ようれて社僧祇園へ

錦綾山金蓮寺ハ京極通四条北にあり 四条道場と称す 時宗にして本尊ハ阿弥陀佛開基ハ浄阿上人也 親恋地蔵 運慶の作也初ハ鳥辺野の墓所にあり 熊野社 當寺の鎮守なり時宗の守護神なり

杜鵑松 方丈の東にあり杜鵑洛陽に来る時先此樹に至りて啼初しとなり

十住心院ハ四条道場の南口にあり真言宗にして本尊地蔵尊ハ弘法大師の作なり染殿皇后常に尊信ありて當院を建立したまふ故に染殿地蔵と称す 額ハ染殿と書して 僧正賢賀の筆也

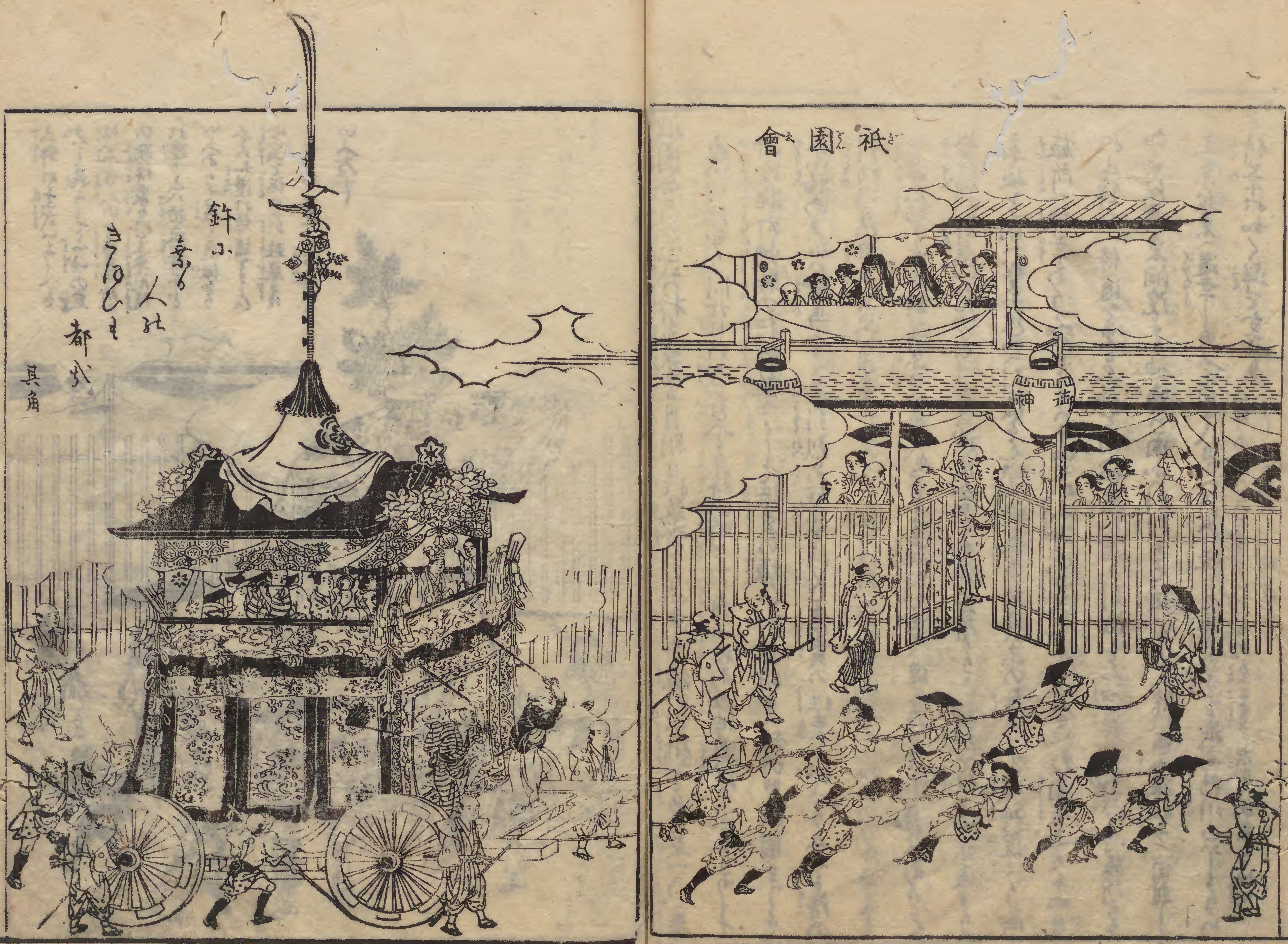
龍池山大雲院は京極四条の南にあり浄土宗にして智恩院に屬す本尊阿
弥陀佛は恵心僧都の作なり開基は貞安上人なり此人安土論の時浄家の宏
才にして信長公厚く帰依したまひ江州八幡に西光寺を建立して貞安をおらしむ
信職との時に信長公御父子明智光秀が為に生害したまふ故貞安上人傍人に代りて
急ぎ京師に登り二条烏丸の邊にて庵室を設かまへ念ごろに菩提を弔ふ其後
秀吉公の命によりて天正の末に織田信忠卿追福のため當院を草創したまひ信忠
卿の法名を以て大雲院殿三品羽林仙巖居士と称す 當院の號これに出たり信長公信忠公御両向墓此所にあり
信長公安土に御在城の砌貞安上人に七種の寺物を賜ふ今當院の什寶とす其中
に法然上人の一枚起請文あり又一体和尚の筆あり其奥に繪像あり圖は達磨大師
の後向の画なり其讃に曰

達磨悟りくらりとひまをあかぬ胸に何の
なんでもすれおちくる〇の事

九年まてそさせんするあをむやくたれ識の附は添院の一筆
御所所さ今
一休判

祇園會の祭式は例年五月朔日に致齋より四条御旅町に榊を立る是一の華
表の旧地なり同廿日の吉辰より鉾の町々には囃子初あり神輿洗は同晦日にして
御迎挑灯煉物の行粧艶々として洛東の賑ひ也六月朔日は鉾の児祇園参りて
祭物あり山は騎馬にて其行列花麗を尽し高貴の往来に似たり五日吉辰の
引初六日の早天より六角堂に於て山鉾行列の前後の鬮取あり此日の夕方より
宵宮錺して山鉾を祭日のごとくかざりて立挑灯をともし連て夜すがら囃子ありて
貴賤の群集いはん方なし七日は祇園會にして卯の刻より山鉾列を乱し四条通より
京極を南へ松原を西へ引渡す此日神輿の祭礼は未の刻にして感神院より御
旅所へ神幸あり又八日よりは十四日の山鉾の営ありて十二日の鬮取あり十四日
の山鉾は三条通を東へ京極を南へ四条を西に引渡す神輿の祭式は御旅所より
四条を西へ東洞院より神輿は南北へ引別れて還幸有る二条を西へ旅社より
二条を東へ還幸しあり又同十八日には御輿洗にて晦日に等し祇園鴨川のかうりは
竹葦の如く群をなせり
山鉾の圖は二三を挙たり今日創祭古實の次第は祇園會細記に
くはしくあれば略す

祇園會



山鉾は祭式にあらねハさ
名も異にして山鉾の定
鉾大舎人の笠鷺鉾所々
の跳鉾家々は笠車風流
の造り山八撥舞など
ありて荘も鹿微なり
今は和漢の錦繍をまとひ
七宝を飾り荘厳に
して天下第一の壮観とも
いふべし

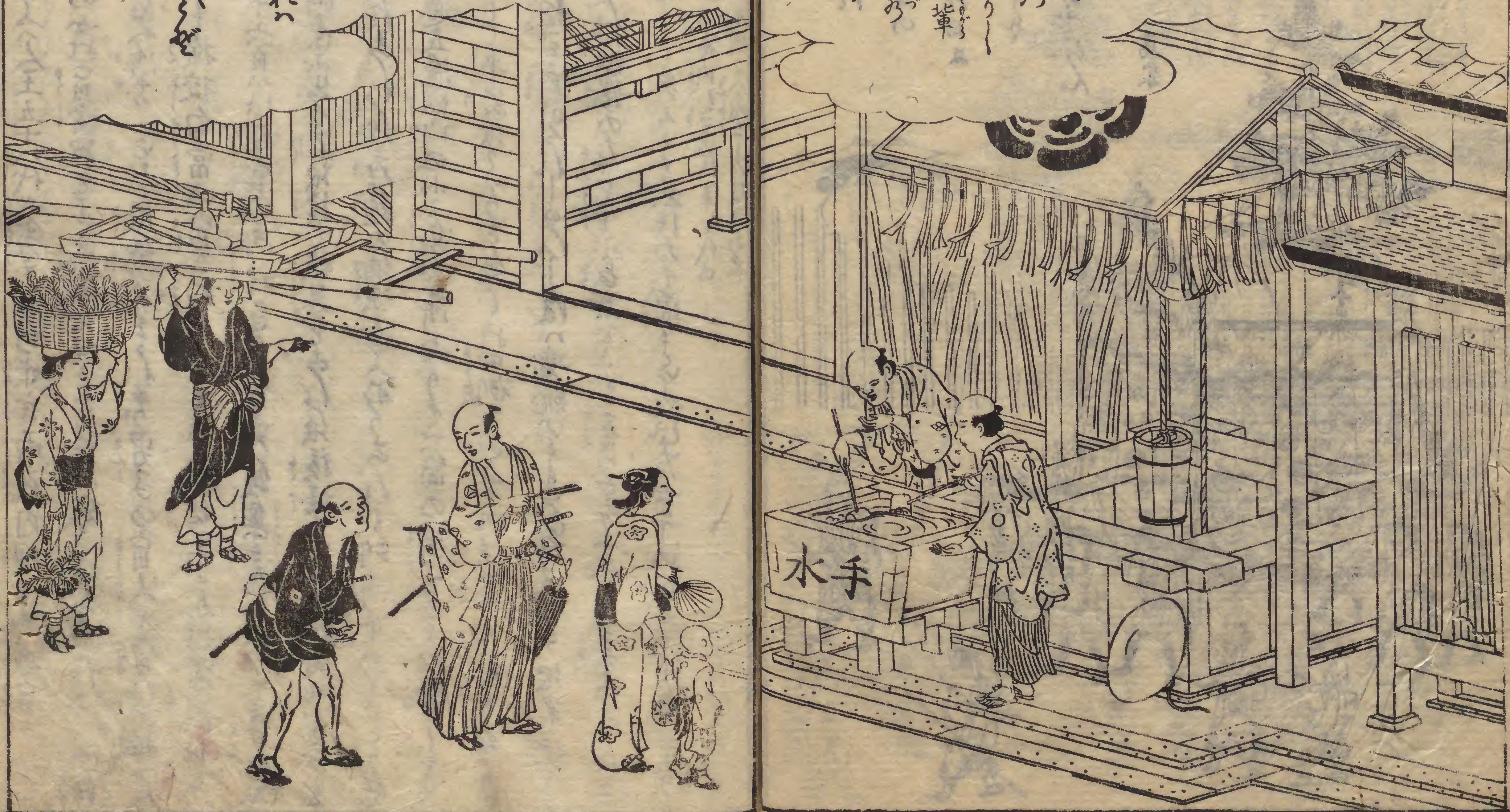
家集

かざした
山鉾は庭の
花越日ぬ
神の園とぞ
人なすらん

爲家

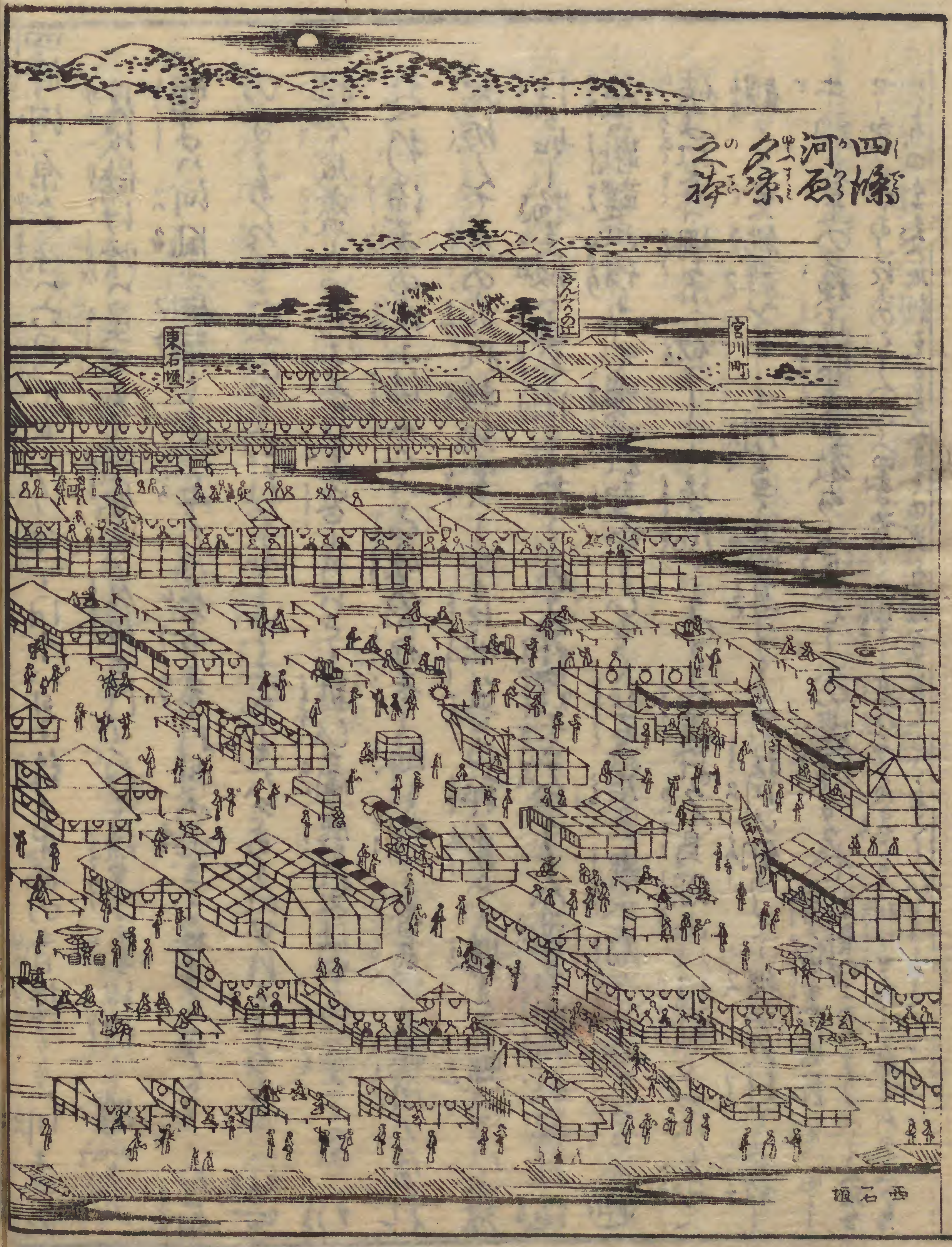
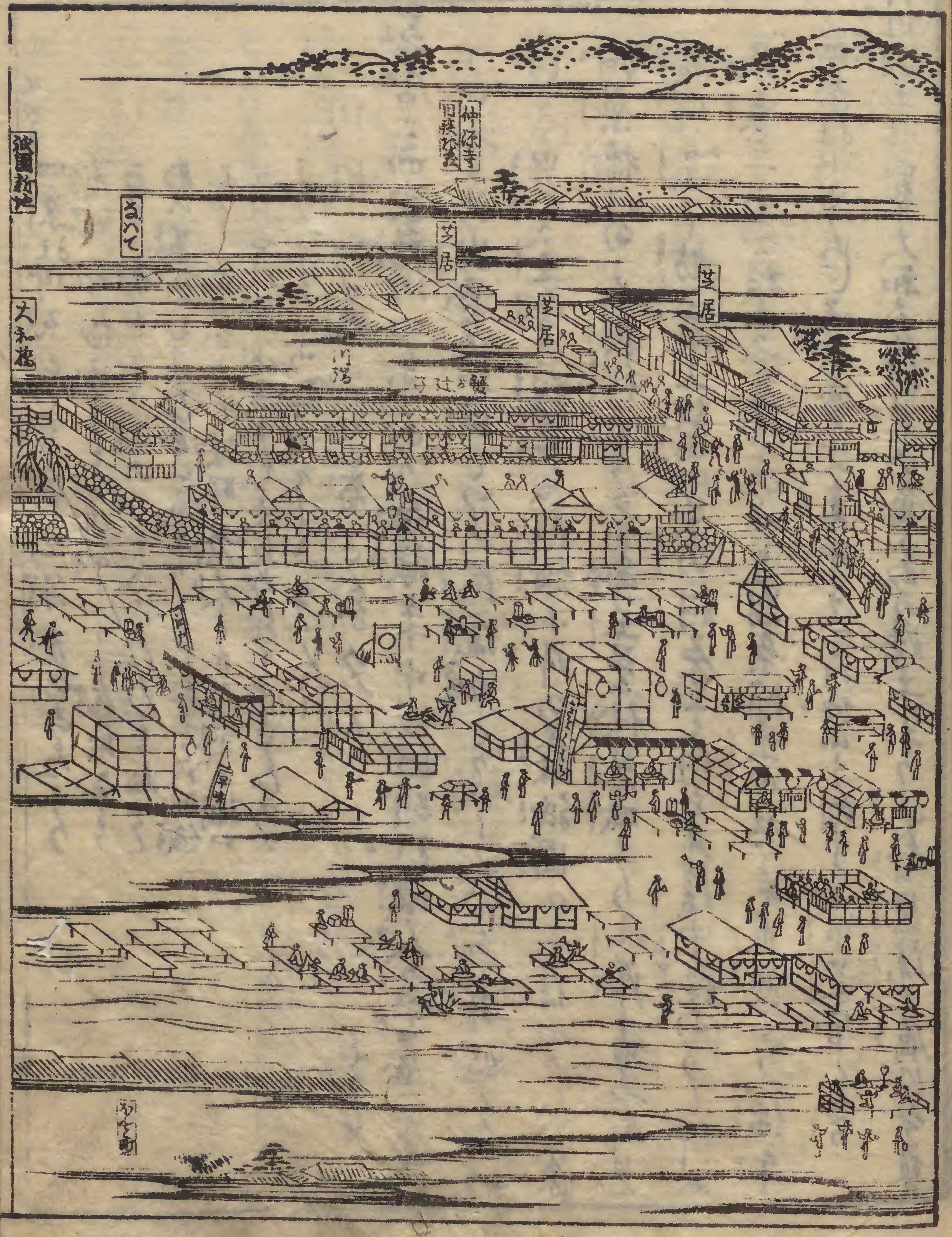
手洗水ハ
烏丸通錦
小路の南にあり
ありむかし
大政所町に
祇園神輿乃
御旅所ありし
とき参詣の輩
あつまりて手水
なしたる
此劔より

今も六月
七日より
十四日まで
井桁、
なりしこそ
手水所と
さだめ
凄冷なる
清泉にて
沸熱をさまし
此水を服すれば
疫病
のがるゝとぞ



座頭積塔といふハ人王五十八代光孝天皇の姫宮雨夜内親王御眼盲ゆへに
より洛中の女の盲者を召し御伽をせさせたまへ賤きハ宮へたまハりて御前
に仕へまゐらするゆへ御前といふ風儀なりそれより男子の盲人も官を授く
座頭と称し撿校勾當の官を給ふ是より此内親王よりの遺風なり
毎歳二月十六日ハ此姫宮の御祥忌なれバ座頭集りて祭をなして尊敬を
拝し東の河原に出て石を積で報恩をなす是を積塔といふ又六月廿四日にも
集會をなす是も座頭の納涼といふなり是も則御弔なりとぞ
今ハ高倉通五條坊門の北に集會所ありて二箇の積塔これを會しく
琵琶を弾じて平家をかたる古くの旧例をもつて此法要を勤るなり
又雨夜内親王ハ瞽かれしをいひ後ハ凍飢のなきやうにはからふるを不便とおぼ
しめされ洛陽の左女牛に長屋をたてて著りせさすに今京童のあざなと
みりのへあめうじあんぐらが杖にかけて通せといひし左女牛の目くらといひつる
なりとぞ 雨夜内親王の御事王代の系圖に分明ならず後考をまつ

四條河原夕涼ハ六月七日より始りて同十八日に終る東西の青樓よりハ川辺に
床を儲け燈ハ星の如く河原にハ床机をならべて流光に宴を催し濃粧の
帽子ハ河風に翩翻として色よりも光ありて月のぬきるに押すかゝる扇
のさまなどそみやびやかなれどなかにもいとかひがひしきハ嫉婦
の今を盛といふうちにて芙蓉も及ばざる粧ひ蘭麝の香はやされ薫てる南ハ行
北へ行く海来の店に体すくハ山葵の口花香に酥を醒し香煎にハ鴨川の流れ
を汲んで京の名の軽を賞しかの口出ハ晋の郭象にも勝まて懸河の水を
注ぐが如し物まねハ鳳合図にも抑へぬる猿狂言大のすまひ曲馬曲枕麒麟の縄
渡ハ鞦韆の侍みて嗩吶の聲かまびすくむかふの店にハ瀧水滔々と落て暑を避
硝子の音ハ珊々と錚して涼風をまねく和漢の名鳥深山の猛獣もあつまりて
観らし芸人群集をなして川辺の遊宴する御祓川の例にして小蝿すら神を退散し
牛頭天皇の蘇民将来に教ゑ玉ひし遺法なりとぞ 昔大内裏の時ハ祭礼一同に
せしなりしをおかれまのちハ四季ごとに行はせて造化ありしを今ハ相守せしてわすれ 朱雀門にあつまりそこにて祓を
火氣の金気を封るがゆへに其の火氣を防くためにとするとぞ



四條河原夕涼之躰
東石垣
宮川町
西石垣
仲源寺
目疾地蔵
祇園新地
芝居
芝居
芝居
大和橋
川端

四条の川原すゞみとて夕月夜のころより有明過る比まで川中に床をならべて夜すがら酒のみものくひあそぶ女は帯のむすびめいかめしく男は羽織ながう着なして法師老人ともに交り桶やかぢやの弟子子までえたりかほにうたひのゝしるさすがに都のけしきなるべし

川風や薄がき着たる夕すゞみ

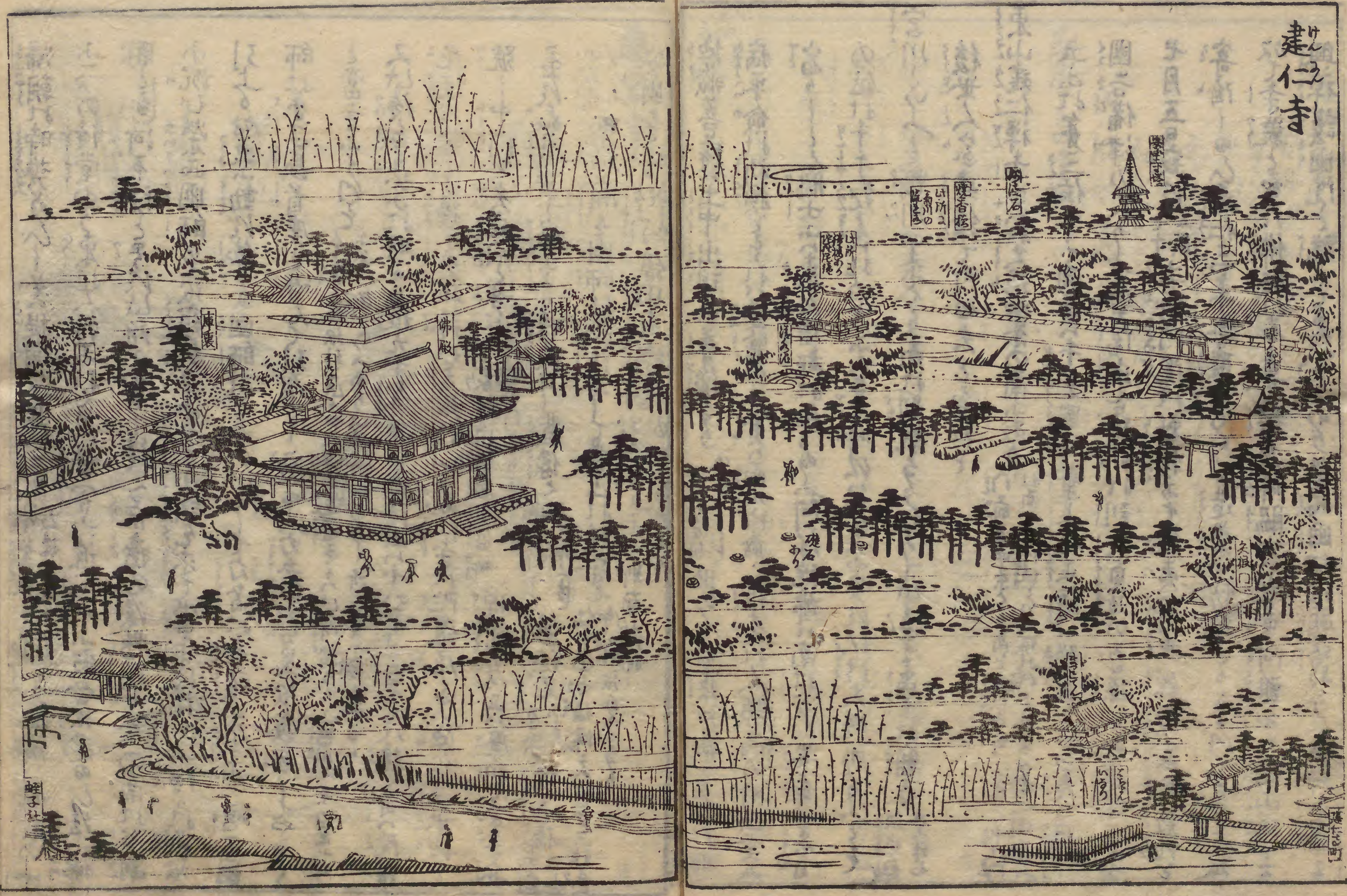
芝居ハ四条鴨川の東にあり永禄年中に江州の浪人名古屋三左衛門といふもの出雲のお国といふ風流女とくらしひそかに舞妓となづけ男女立合の狂言を仕組北野の森林祇園の西林なりしへ又四条河原橋の西にて興行しけるに秀吉公伏見城より上洛し給ふ時見物群集し妨に及ぶ故に四条の河原より所を移し其後中絶ありし所に承應二年に村山又兵衛といふもの四条河原中島にて再興し又縄手四条の北にうつし遂に寛文年中に今の地にうつして常芝居となる

仲源寺ハ四条大和大路の巽の角にあり浄土宗にして智恩院に属す本尊地藏菩薩ハ土中出現の尊像なり（一説にハ定朝の作なりといふ）世の人目疾地藏と称し眼病平愈の祈願をなせハ霊験あり実ハ雨止地藏之住来の人驟雨の時此堂に宿りしとぞ脇士ハ恵心僧都の作なり又阿弥陀仏ハ南の方に安置し春日の作の千手観音ハ北の方にあり薬師仏ハ方丈に安置弘法大師作なりとぞ

宮川といふハ鴨川四条より南の別號なりむかし此ほとりに禹王の廟あり（洪水を鎮るの為也）後世人家建續て町の名となれり

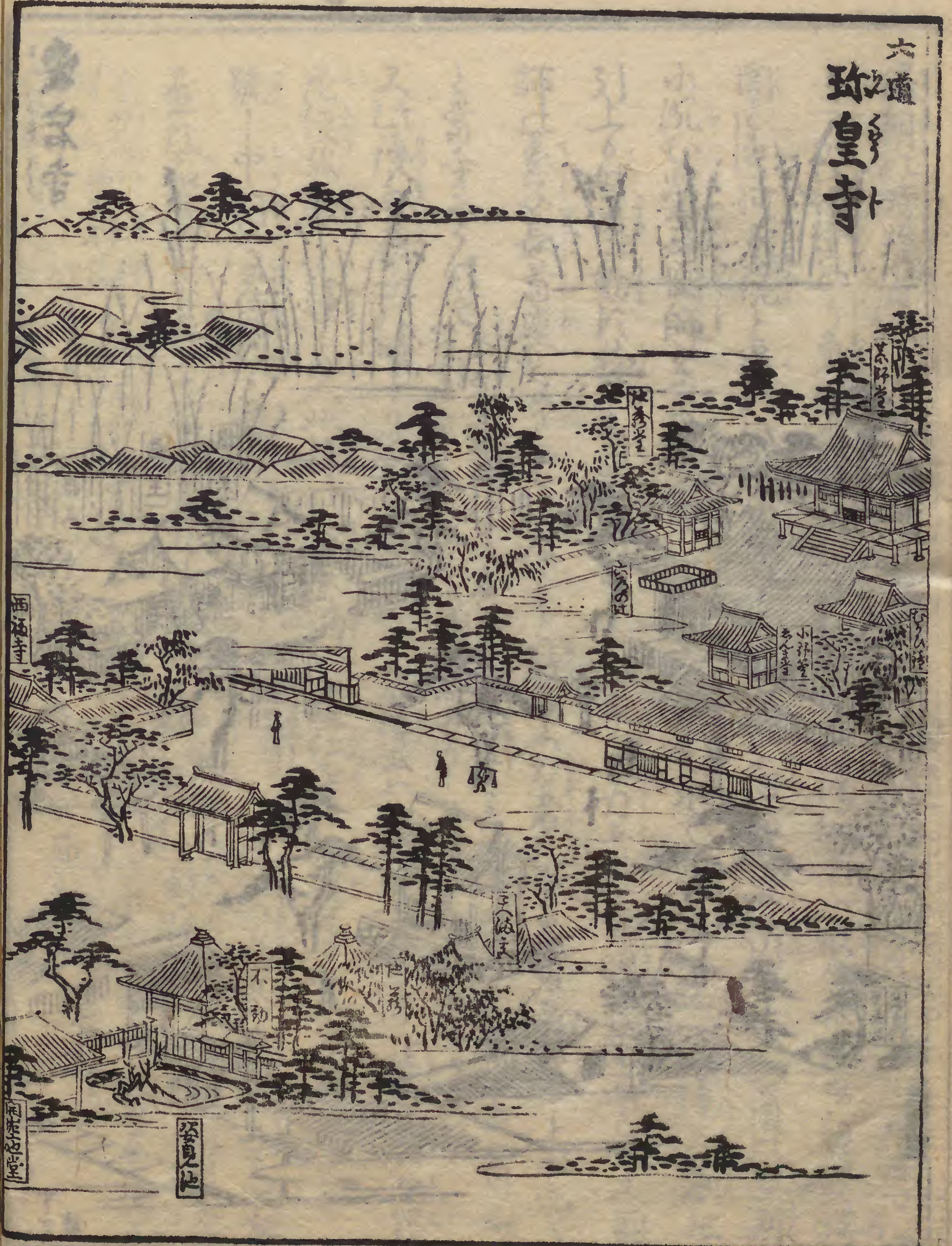
東山建仁禅寺ハ大和大路四条の南にあり（門前通四条より南を建仁寺町といふ中の門ハ南より竹垣をもて結ひ代々是を建仁寺垣といふ）五山の第三位にして開基ハ千光國師葉上僧正諱ハ榮西といふ出生ハ備中國吉備津の人にして賀陽氏也薩州の刺史貞政の曽孫なり建保三年七月五日寂す（七十五歳）土御門院の勅願にして征夷将軍源頼家卿敷地を寄附しあまねく建仁二年伽藍ことごとく造営し勅願寺なるによりて年号をもて寺號となす仏殿の本尊ハ釋迦仏脇士ハ迦葉阿難なり開山塔を興禅護國院と號して東の丘にあり榮西國師の廟塔なり又國師（字ハ明庵）

建仁寺



帰朝の時携へかへりし菩提樹ハ當院にあり 今ハ繁茂して河原院跡ハ佛殿の北
にニッの鐘堂あり東は大鐘也是融大臣六條河原に殿舎を建られし後に佛
閣となり河原院と号す此所にありし鐘也荒廢の後鴨川七条の南の深淵
に沈む栄西國師是を窺知りて官吏に訴へ求て當寺に揭て此鐘の淵を
引上る時更に動ず依て國師ひそかに七力者に音頭に栄西と唱へ國
師の弟子長首座と呼んで引だしと教ゆ力者大勢是を負擔してやすく
と當寺につりを 今重き物を引に此名を呼で運送さするハ此所謂なり又鴨川七条の南七町に釜が淵といふあり此鐘の沈ありし所也實ハ鐘が淵なるをあやまる
又此鐘毎夜子の時より数九十八聲撞く晨鐘に八十八聲合て百八撞く昔ハ陀羅
尼經を誦して撞しゆへ此鐘の音を称して建仁寺の陀羅尼といふ池を法水池と
號し中門を矢立門と呼ぶの 平家の一門門脇教盛卿の舘の門なりといふ 禅居庵に八摩利支天王を安
置す嘉暦二年唐土より将来せし靈像也 應験新にして常に詣人多し 妙徳石 方丈の 焼香橋 浴室の前に
の石橋をいふ 樂神廟を國師の勧請にて當山の鎮守也 桂中正吉像 漆文の筆也
安國寺塔 方丈より戌亥にあり 織田有樂塔 正伝院にあり則有樂翁の御前にあり

六道 珍皇寺



六波羅蜜寺

蛭子社は建仁寺門前にあり祭る所蛭子命栄西国師勧請しめ玉ふなり
建仁寺境内の鎮守 御祭は九月十六日

等覺山念佛寺は六波羅密寺の西にあり むかし愛宕里といへり今此寺の名は當寺に止りて世人愛宕寺と称す
眞言宗にして開基は弘法大師中興は千観内供本尊観世音千躰の作
なり左右の脇士は毘沙門地藏尊千観内供自作の像を安ず此人姓は橘氏
相別の刺史中納言頼顕卿の子也幼名を千観丸といふ成長して叡山運照
内供の室に入て出家し顕密の碩学となり一世の間常に口には佛號を
修しける事止事なし故に念佛上人とよぶ又堂内に地藏尊を安置す此
像を火伏地藏と称して毎歳正月二日経を讀て諸人に火伏の札を出す又星
を天狗寅と称す車寄松 此松に轅を寄しとぞ 千観内供はつねに車に乗て往来し

普陀洛山六波羅密寺は六道の西にあり眞言宗にして智積院に属す本尊
十一面観音は立像長ヶ五尺空也上人の作 西国十七番札所又洛陽観音巡りの其一なり 傳に曰
村上帝御宇天暦五年に疫病時行て死するもの数多し須空也上人是を

憐み給ひ十一面観音の像を作りて車に乗せ洛中を自ら牽ありき給ふ今も當寺
本尊之観音に供ずる曲茶を疫人にあたへ給へば一日に平愈す村上帝これを
叡感ありて吉例として毎歳元三に服し給ふ万民今に此例をならひて名を王服と
號し年中の疫を免るといふなり北の方は地藏尊を安置す此尊像を本尊として六波羅の地蔵堂
と号す康頼の寶物集に曰東山に貧しき女ありてつねに地藏を信じける此女に来世(?)の苦を
[illegible]
の僧来りて何となくくれば歎きのあまりに向ひて其事の子細を語りければ
僧この家より其事くはしくそ云しくとて去りぬ(?)其のち女家にかへりて
見ればかの僧の持たる女の棺(?)しきりに昇りて地藏の御足に土お(?)つきてぞありし
為に来りて拝し奉りければ地藏の御足に土付けてありしとなむ
[illegible]
うけの地藏とも号しける
南の方は薬師佛を安置す傳教大師の作也開山堂は空也上人自作
の像あり姿見の池は上人ここにて姿をうつし自像をきざみ給ふとぞ

阿古屋塚 本堂の北にあり又桑坂の遊女阿古屋が塚也上に
無縁の石塔并夫のやしろあり
空也上人いせ太神宮を勧請の社
弁展よりけしうた佛音(?)なそ
弥陀とのみ人を空しくすゝめつゝは我此世の神といひけれし

上人あれ成吟て
世の中ハさくらあはれなるの雨やどりかなの後家ハ来世なりけり　空也上人
一声も南無あミだ仏といふ人の往生ハあやしからし　仝

珍皇寺ハ建仁寺の南松原通にあり　六道と号す　本尊薬師仏ハ伝教大師の作にて開基ハ慶俊僧都中興ハ弘法大師　篁堂ハ小野篁の像を安置せり　此所冥土へ通ひし道なりとぞ　焔魔堂ハ東の方にあり　迎鐘ハ七月九日十日参詣の人此鐘を撞て聖霊を迎しむる　六道の辻　本堂の前にあり　当寺ハ人代平安城の葬所なり　桓武天皇延暦十三年に長岡より此京にうつし給ひし時此所を後人の葬所と定め給ふ由迁都記にみへたり又愛宕とも云　源氏物語に桐壺の更衣を愛宕といふ所にてなん葬けると云も此所の事なり　河海抄にハ弘法大師の聖跡として東寺の長者管領しけるとなり今ハ建仁寺の塔頭大昌院の兼帯所となる

北斗堂ハ六道の東弓町の末にあり北辰を祭りて松原に高燈籠をかけられし城南淀川の円松運送の因当地に常夜燈をかゝぐ　熊野の謡曲に北斗の星の曇なき御影ハ応仁の兵火にちりぢり一年金森宗和江府より上洛の時清水寺に詣て此灯籠の倒れて苔に埋れしを寺僧にこひうけ吾妻の寄物として今は芝の御館にあり

晴明の社ハ宮川町の東松原の北にあり古ハ此地に安倍の晴明の塚ありしが新道の家居ひらくるに及んで次第に塚も崩れ平地となる故にちいさき社を建て其まゝ存る

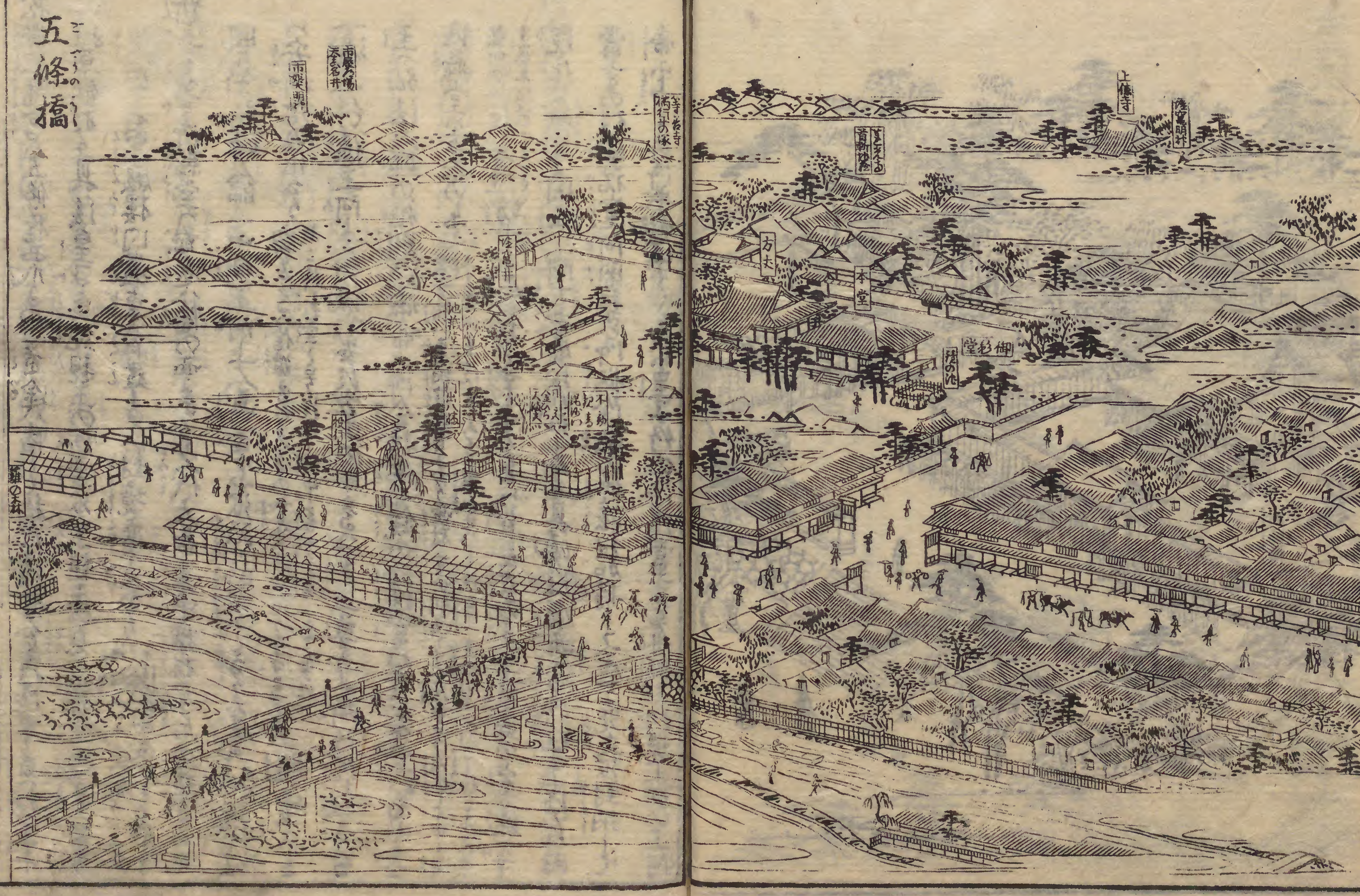
十禅師社ハ晴明社の南にあり　むかしハ境地広くして樹林森々たり牛若丸此林にて千人斬ありしとき武蔵坊弁慶も此社前にて主従の約をなせしと云々

若宮八幡ハ五条橋東五町にあり祭る所石清水と同神也旅ハ六条佐女牛にあり故に佐女牛八幡とも号す　例祭ハ八月十五日放生会あり　旧地ハ若宮通六条の今の奥柵通の南人家の裏に小社あり是旧跡　今の此町なり　天正年中に此所にうつすと

五条橋ハ初ハ松原通にあり則ちいにしへの五条通也秀吉公の時此所にうつし故に五条橋通といふ　宝ハ五条坊門に擬す欄干のは紫銅擬宝珠左右に十六本ありて北の方西より四ツ目に橋の銘あり　雒陽五条石橋正保二年乙酉十二月吉日
奉行　芦浦観音寺舜興
小川藤左衛門尉正長

此橋上の半より東ハ旧ハ洛東の勝地木の間くに見れて平安の佳景なりと此蒲団着て寝たる姿や東山　嵐雪

若宮八幡


五條橋
方丈
本堂
御影堂
地蔵堂

松豊八幡宮ハ五條橋西爪にあり首途八幡とも称す清和天皇の御宇貞観年中
に草創ありて其後皇子貞純親王の御霊を祭る親王の息六孫王経基公尊
崇ありて宮殿楼門巍々と再建ありて封境広大なり（外封およそ十二町ありしに平清盛の代滅亡してお絶となる）
新善光寺御影堂ハ首途八幡の西にあり久代天長年中檀林皇后の建立にて
開基ハ弘法大師也中興ハ王阿上人真言宗に改めて時宗となる本尊ハ阿弥陀仏
ハ安阿弥の作なり（初の本尊ハ信濃善光寺の如来をうつし作りて本尊とせんと故に御影堂と号す今坊中塔頭に安置す）脇壇にハ
一遍上人の像王阿上人の像を安す方丈の本尊ハ一光三尊にて阿弥陀観音勢
至ハ弘法大師の作則嵯峨帝の御念持仏也鏡の池塩竈の井ハ本堂の西にあり
地蔵堂ハ方丈の東也（当寺始ハ東洞院春日にあり檀林寺の別所にて尼寺なり永安年中に炎上して東河原院よりうつるを應永廿八年佐女牛室町のほとり享禄二年又条新町のほとりに又天正十九年此地にうつる）坊中に扇をおりて業とするものハ昔安元年中平敦盛の室蓮華
院尼公此寺に閑居し阿古女扇を製せしより其頃後白河帝御悩つよくおはしけれバ
當寺の住職祐寛阿闍梨ハ御悩除滅の修法を加持して扇に呪文を封納して
帝に奉る即御平愈ましくれバ皇子行の御所當寺を再興し剃髪ありて王阿
上人と号しける扇ハ古例にまかせて世に名あるとなり高貴の献上として都鄙の賞
翫となれり

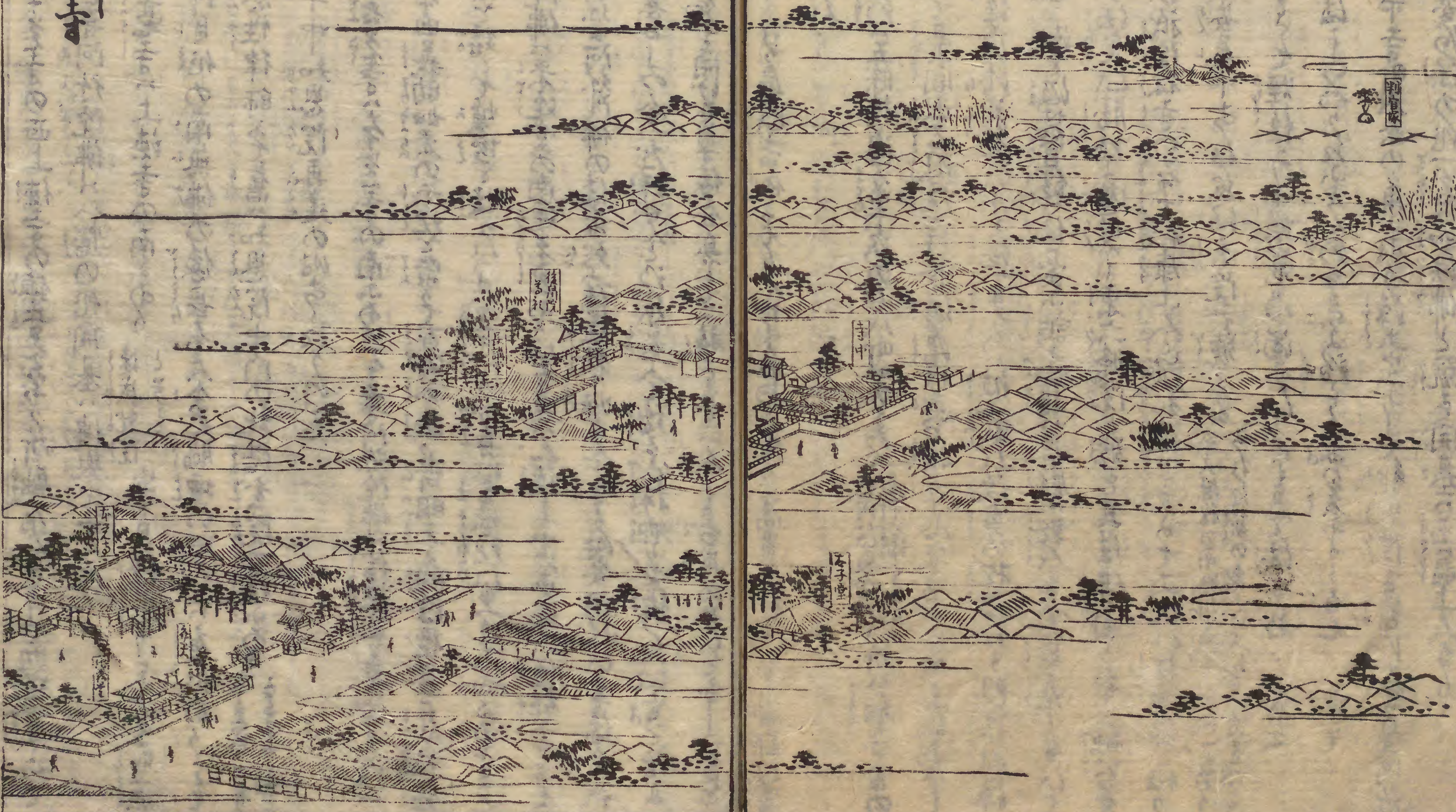
河原院の旧跡ハ五條橋通万里小路の東にて八町四方にあり（鴨川ハ其殿舎の東を流るゆゑに）此所ハ融左大臣の
別荘にして其堂閣水石風流をつくし遊蕩の美を擅にし山水築をて草木を栽し
四時の花絶ず池を堀てハ水を湛へ魚鳥ハ波に戯れ陸奥の松嶋を模し難波津
より日毎に潮を汲せ管絃ハ仙臺に調ひ文籍ハ月殿に翫ぶ其人没後荒廃しけれバ融公の子
後寛平法皇此勝地に遊覧し東六條院と号す其後仏閣となし融公の第
三の御子祗陀林寺の本主仁康上人此に初めて丈六の釈迦仏を作り
て此院に安置しけれバ河原院と号しける（今五条橋の南鴨川高瀬川の間に森あり これ河原院の跡といふ河原院の遺跡也）

古今　君まさて煙絶にし塩竈のうらさびしくも見え渡るかな　貫之

続後拾　塩竈にいつかきにけん朝なぎに釣する舟ハ爰によらなん　業平

本覚寺ハ下寺町五条の角にあり浄土宗にして智恩院に属す本尊阿弥
陀仏ハ安阿弥の作一名ハ如法仏と号す開基ハ玉翁上人なり

東九條
判官塚
下寺町
長講堂
恵子堂



本覺寺

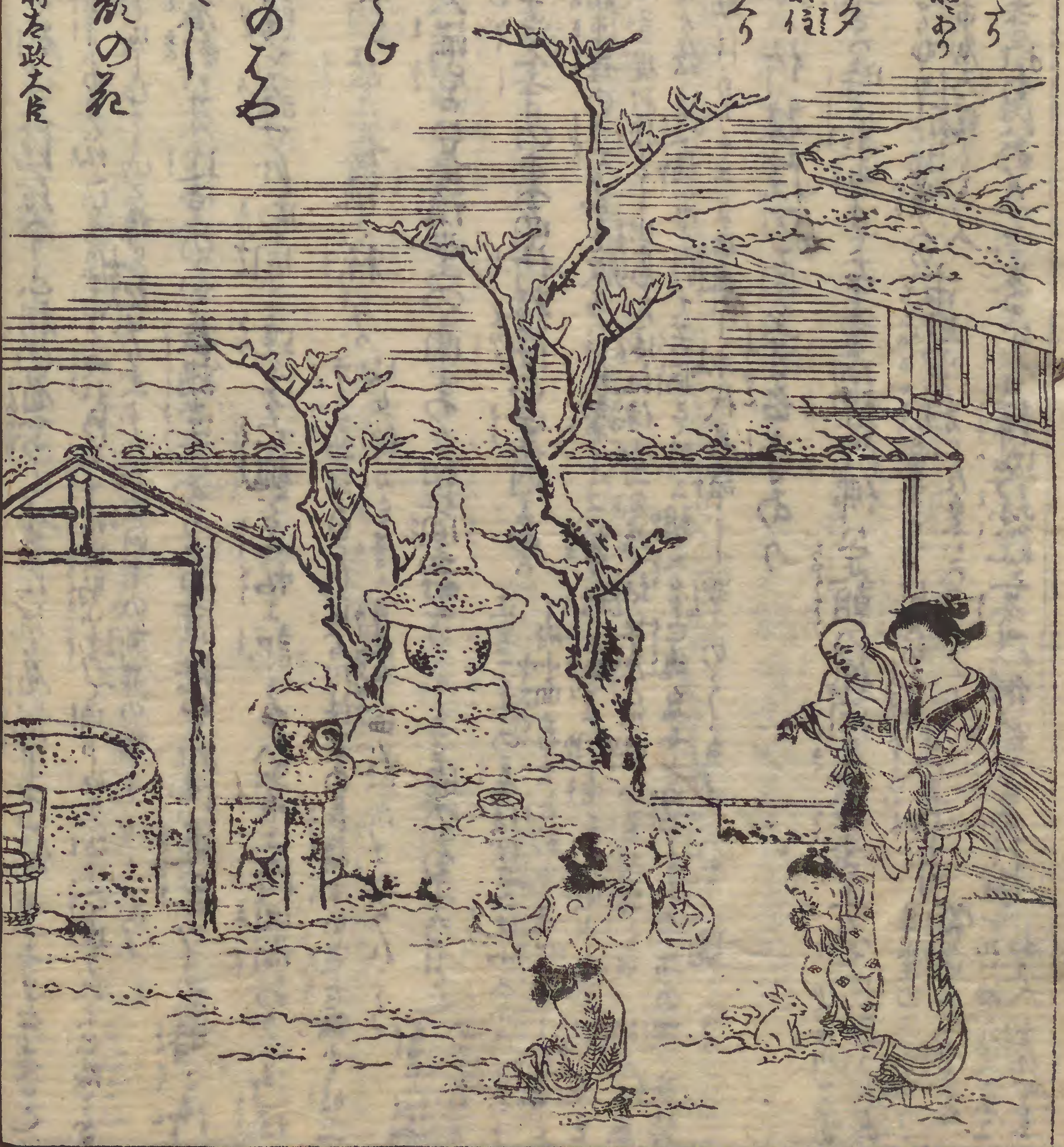
塩竈社ハ本覚寺の西上徳寺の鎮守なり所融左大臣にして則塩竈山と
號す本尊阿弥陀佛ハ八幡の作開基ハ傳譽上人なり
五劫堂白毫寺ハ上徳寺の南にあり　速成就院と号す　宗旨ハ律宗にして本尊ハ聖徳
太子の御自作の南無佛の像長さ三尺余又脇壇の四天王ハ唐作なりとぞ
開基ハ忍性律師にて舊ハ知恩院中門の北浩玄院の後にあり　今其地に古井あり五劫水と號す
慶長年中知恩院再建の時ここにうつす
来迎堂新善光寺ハ本覚寺の南にあり本尊阿弥陀佛ハ信濃国善光寺と同一
躰なり本田善助如来の示現を蒙りて百済国の齊明王に閻浮檀金一斤を得て此
朝に如来を鑄たて爐壇を據く佛ハ其光中より分身したる像現れたるの本尊也
貞別阿弥陀佛ハ来迎堂の南蓮光寺にあり此本尊ハ嘉禎年中に東國の僧都ふもとにて
佛工安阿弥に阿弥陀佛の像を作らしむ像成就し帰らんとする時安阿弥此尊像を布代
ありしそ甚おしみ今一度拝せんと別れ暮ふて麹ゐる山科郷にて追つきけ此上旨を語る
かの僧則笈を開けば尊像分身して二躰となる二人ともに奇異のおもひをなし一躰を

東西に分れて別る其後此佛ハ今山科の貞が家にあり貞が帰して其像を當寺に安置すると
馬止地藏　當寺にあり元此仏之住る像土中に埋れし此所平清盛駒にまして通りける途に止て進まれ不思議を為して堀しむるに此像出現せりよりて今条河原の斬罪の場にありしとぞ
後白河法皇の宸影ハ来迎堂の南長講堂にあり當寺ハ法皇の御建立にして時々御
幸ありて貴賤を論せず叡聞に達する亡魂を名帖に記しあひ常に御回向ありて御講
を修しめ給ふ所に故に長講と称しける　平家物語に曰く後白川法皇の長講堂の過去帳にも妓王妓女佛刀自等か尊霊と四人一所に入られける
萬年寺の天満宮ハ長講堂の南にあり初ハ間之町万年寺通の南にありしを　舊地に天満宮の古木存せり
鬼頭天皇ハ本覚寺の東南竹林院の堂内にあり　正安二年の春後伏見院小山に御幸ありし附小面なる京なる重清供奉し朝夕勤く
の官女をみ初連理の思ひをなして又其弟を縁つ八重姫を娶るに胡妻ふかく嫉水食を断て死を
重清ハ仏菩提れ癒し出家の縁記伝ゑ二鬼婦ハ結れ病を結ひ若楽坊と號し朝よりゐるゐ
して居たりける后に疫病なかりけて若悩を時に朝夕か亡魂鬼女と現し苦楽坊の頭を落れば
忽平癒ここと功徳ありて共に成佛し末代其證として頭をのこし鬼頭天皇と號しける
橘行平卿塚ハ竹林院の南金寺君寺にあり
市中山金光寺ハ時宗にして本尊阿弥陀佛ハ定朝の作開基ハ定阿上人之　初ハ堀川七条のにありしを今の
本願寺境内なりしむかし此地ハ買人の市比賣社　當寺にありしむかし今の市場なりける市座の場となりて　そのとき当社ハ八月十二日
天真井　本堂の西にあり　洛陽の名水之
延壽寺ハ金光寺の南にあり本尊ハ大日釋迦弥陀三尊此銅佛ハ嵯峨の作之　初ハ油小路六条にありしを今金光町と云

国立公文書館 National Archives of Japan

夕顔塚は五条にあり
今は堺町松原の北にあり
源氏物語に夕
がほの上此所に住
たまひしといへり

新古今 夕かほをよめる
白露のなさけをきける
ことのはや
ほのぼのみえし
夕顔の花
前太政大臣



籬の池は高倉五條の南宗仙寺の堂前にある井をいふ旧河原院の封境にして真遺跡なり当寺は曹洞宗にして開基は大江和尚なり 本堂の額は正水が筆なり

藍染川は五条高倉坂経て間之町より人家の下を南へ流る濁水なり 是も河原院の名跡といひ伝ふ

花開稲荷社は松原通高倉の西にあり 稲荷町といふ 此所は松永貞徳公翁が居所にして俳書御傘を撰す

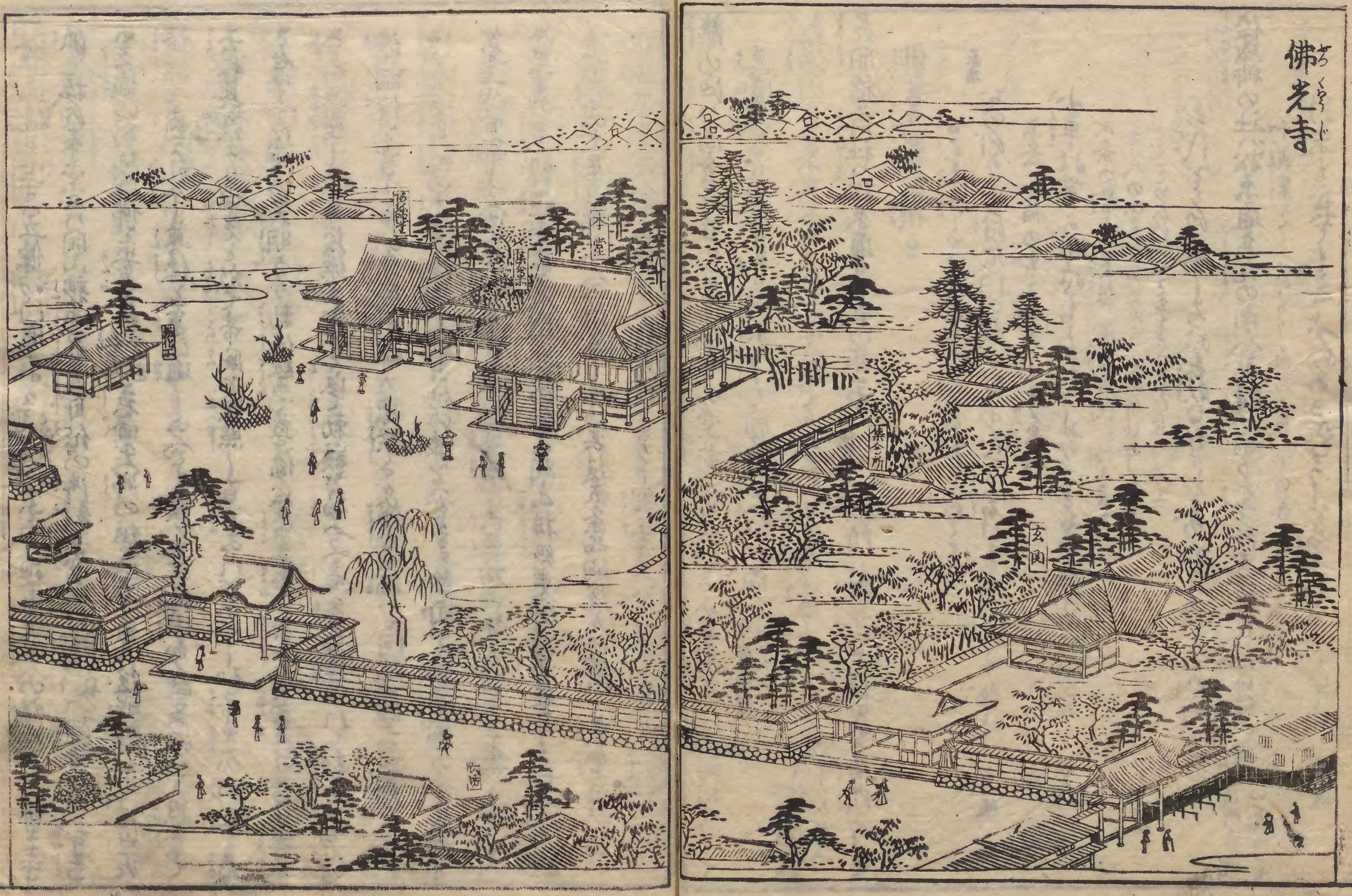
家集
古宅立春といへる事を五条花開の家にていへる
おのづから荒坂門の松はみそおれる宿は春にあふての飾　貞徳

五条花開の宿に會ありし時夕顔を
小車はゆきのしれちと夕ながしゆくでこそあれ我から夕顔の花　仝

又条の宿にて夢想 稲荷の社は此辺なる
翁人の此花さくの陰にきて此所むかしの花と
とこそいひ伝へあとに安永のころに侭りて
は
万代をこの河のやしろは春秋は花さへそのれてしれえ給る

俊成卿の社は松原通烏丸の南人家の後にあり此所五條三位俊成卿の霊を祭る 此所は卿の宅地なりとぞ

千載集えらひ侍りける時うたたへ人への歌をつかへて
新古今 行末は我をも忍ぶ人やあらんむかしをしのぶ心ならひに　俊成


佛光寺（ぶつくわうじ）
阿弥陀堂
集会所
本堂
玄関

汁谷山佛光寺ハ五條坊門通にあり（初め興正寺と号す）宗旨ハ親鸞聖人の弘法にして佛光寺派と称す本堂にハ開山親鸞聖人自作の御影を安置す（撰像にて長弐尺ばかり）阿弥陀堂本尊ハ三尺の阿弥陀佛を安置す（長三尺一寸ばかり）慈覚大師の作にして本尊ハ後醍醐天皇の御時に盗賊寺内に乱入し尊像を奪ひ逃るといへども重くしてせん方なく二条河原に捨置て去ぬ其夜より瑞光を放て帝闕を映照し百官おそれあやしむ帝光の行末を尋ねさせ給ふに弥陀の光明なり勅使驚て尊像を後醍醐帝に奉る宮中に安置し其後興正寺に遷座し寺号を佛光寺と改て勅額を給ふ又康永年に詔られて親鸞聖人の絵詞傳を書しめ又專修念佛の棟梁たる綸旨を賜る阿弥陀堂の脇壇にハ聖徳太子自作の木像法然上人自作の像を安置す餘間を存覚間といふ本願寺第三代覚如上人の息存覚上人こゝに寓居し六要抄四部九帖等を撰しあへり又當寺の草創ハ親鸞聖人四十余の時山科郷東野村に建立し興正寺と號し徒弟の上足真佛上人に附属しその其後五条西洞院九條殿下兼實公の別荘花園亭を聖人に寄附して花園院と号し興正寺の院號とせり（九十四代の帝花園院の御時勅願所）

懸り後醍醐帝の御宇元應元年に當寺を以て今比叡竹中森汁谷に移を改む

東ハ阿弥陀峯を限り西ハ柳原に至り（今七条河原）南ハ菅谷を限り北ハ汁谷大路に至る其後足利尊氏公の祈願寺として佛供田を寄附しあまた足ありて宗門繁昌し尊信の僧俗諸國に充満し塔頭四十八坊に及べり然るに文明年中當寺十四世の住職経豪上人山科本願寺蓮如上人に屬し寺僧四十二坊其外國々の門徒数輩随順せる故に経豪上人の舎弟経誉上人當寺の住職として十四世を相續す（所在の六坊今寺内にあり）秀吉公の時大佛殿建立になりて此地に移さる

四條立賣ハ四条通東洞院東をいふむかし大内裏の時此所諸品及び商人の市場也（今毎朝高倉四条の北に野菜の市立ハ往古の餘風也）

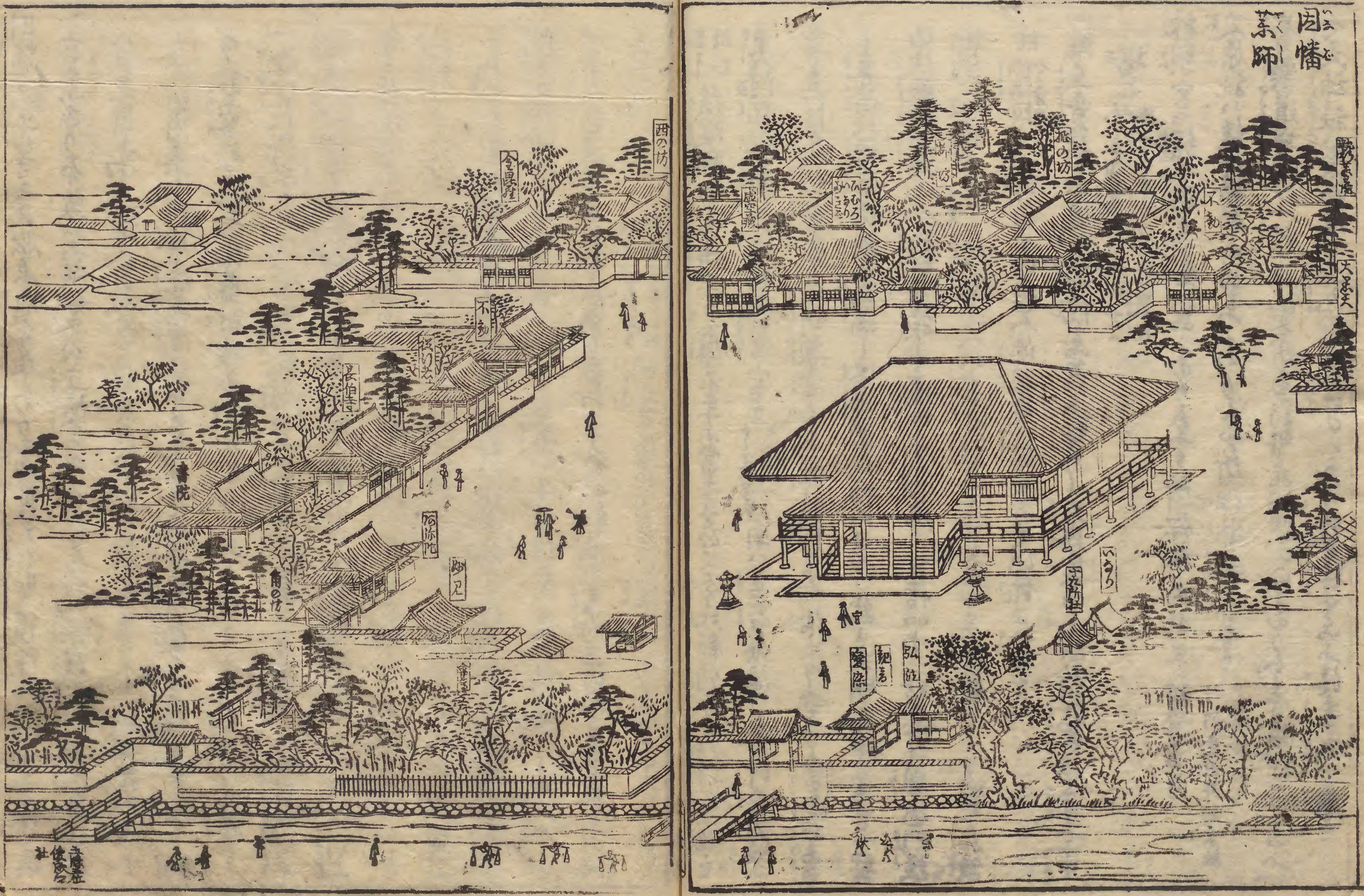
神明宮ハ綾小路高倉の西にあり祭る所伊勢内外の神宮なり

大原社ハ綾小路新町の東にあり祭る所伊弉冊尊なり（丹州桑田郡大原社とは神也）

膏薬道場といふハむかし四条の南新町と西洞院の間にあり今膏薬辻子といふ

白天神社ハ東洞院と烏丸の間なる辻の北にあり竹之辻子といふ清香庵と號を

因幡薬師



因幡堂平等寺は松原通烏丸にあり寺務は天台聖護院御門主寺僧は真言宗なり本尊薬師如来は立像にて長五尺二寸碁盤の上に立たまへり脇士は日光月光十二神八大菩薩を安置す傳記に曰此本尊は天竺祇園精舎四十九院の内東北の角療病院の本尊なる牛頭栴檀の像にて釈尊手づから刻みたまふ聖容なりしがかの伽藍破壊に及んとせしの時東方をさして飛去たまへり一條院の御宇長徳三年因幡國賀露津の海面に夜々光あり國司橘行平卿漁人に命じて網をおろさしめ海底に潜しむるに光明赫奕たる薬師仏を引上奉る其後七年を経て長保五年四月七日に行平卿の居館烏丸高辻に飛給ふとして飛来し給へり（後光臺座は因州に止まる座光寺と号して今にあり）則館を佛閣に造りて安置し給ふ今の因幡堂なれども寺領は行平卿の息光朝禅師なり初寺務となる承安元年四月八日高倉院より勅額をたまひ平等寺と號す永暦二年には後白河院此所に幸し給ふ今の堂は足利義教公の再建なり橘行平卿の寿像は堂内西の間に安置す東の間には夜叉神を安す（後堂に井戸あり火災の用なりとぞ）鎮守は後白川帝の院宣によつて十八所の神を

勧請す（後に神託ありて蛭子の神一所をかへ故に十九所なり）観音堂の本尊は慈覚大師の作愛染明王弘法大師を堂内に安置す鐘楼は本堂の西にありて常に注連を張之（毎年二月十九日は初縁供養あり一日より此日に注連を引すなる恒例とぞ）執行薬王院には大黒天を安置す（當院は祇園御旅所将井社を兼帯す毎年六月七日此所にくり更まる）歓喜天不動明王を安す撫の坊には稲荷水室秋葉社二社をまつる又虚空蔵を安置す西之坊には金毘羅を安置す桂芳院には稲荷社あり又不動役行者を安す長伯寺は裸形阿弥陀仏を安置す慈覚大師二條の后の願によりて女人成仏の證に作りたまふ金光の阿弥陀仏は恵心の作なり（とは旅なり）京極誓願寺又粟島明神妙見菩薩を安す角の坊には稲荷大明神鎮座す

寺 當寺の本尊は日本三如来の一（信濃善光寺 嵯峨釈迦仏）其一にして釈尊在世の尊像也御戸開あるときは勅會の法事音楽等ありて厳重なり代々の天子御厄年にあたらせたまふ年は毎月勅使参向ありて御祈禱あり冥加を薬師に請ひ給ふ繁昌社は高辻新町の東にあり祭る所辨財天女也（今真言の僧あり住まる）當社門前町の産沙神とし祭は九月廿日也

朝日宮は白山通（今の鉄座町より）五条の北にあり祭所天照太神なり清和天皇の御宇貞観年中倭姫の御告によりて丹波国桑田郡穴生村に造営しが其後正親町院御宇元亀二年に今の地に遷座し（祭は九月十六日） 猿田彦神石（社内にあり 霊験ありとて） 飛梅天満宮（末社六ヶ所の内にあり 太宰府飛梅の古木を蔵む 則菅家の類あり）

神明宮は富小路五条の北にあり古此所は融大臣の殿舎の封境にて此地伊勢太神宮遥拝所也後世ここに社を建る（祭は右同日なり 今も言い伝ふなり）

諏訪社は五条の南二町諏訪町にあり祭所信濃国諏訪社と同神なり（歌道を学ぶ人此社に祈誓をかけて剣を奉納す）

新玉津嶋社は松原通玉津嶋町にあり祭所衣通姫にして紀州玉津嶋と同神也俊成卿の勧請なり 祭は十一月十三日也（為家卿若年の時此社に毎月六度づつ百首の歌をよみはじまり）

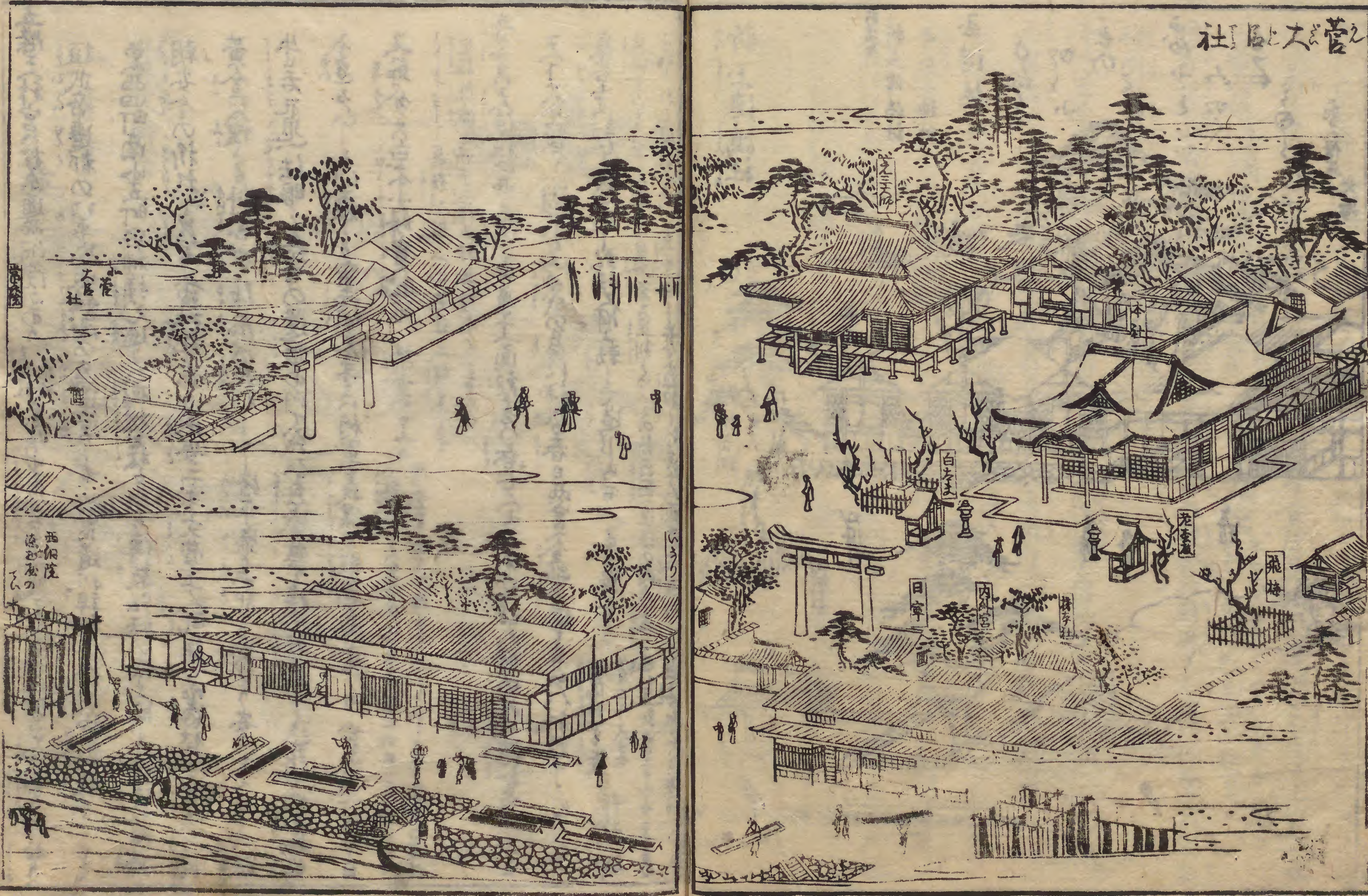
新続古今
たのむかな我らかなれ跡をつぎて初し玉津嶋姫　前太政大臣

菅大臣社は五条坊門西洞院にあり祭所天満宮にして則菅原是善卿の館なり祭は八月十六日 拝殿の額は天満宮と書り（竹内御門跡良尚法親王の筆也） 天満宮降誕之地（八分字の石表あり書は冷泉家 亀石の筆なり） 誕生水（本社南の垣の内にあり 亀石碑の銘を書り） 大師堂（弘法大師自作の像を安置す） 榊本社（近年上冷泉家より勧請しけるとなん）

北菅大臣（菅大臣の北門にあり祭所 菅神の御子なり） 常喜院（北菅大臣の西に隣る 金剛力士堂あり 荒木天満天堂内に安置）

新玉津嶋社

新続拾
新玉津嶋社
歌合に神祇
玉津嶋よるかはらぬ云のこれ葉ふとみかくちる玉もらん
前大僧正光済


菅大臣社
本社
白太夫
老松
飛梅
日宰
内侍宮
小菅大臣社
西洞院

五條天神宮は松原通西洞院にあり 天使社とも称す 祭る所少彦名命 相殿は大己貴命 天照太神なり
桓武帝遷都の初平安城鎮衛の為造営し給ふ 医道の祖神なれば古は宮殿巍々として
東西四町南北五町の神領に巡らし樹林森々たり 伝教弘法の両大師も入唐の時帰
朝安全の祈祈を修す 當社記にあり 永暦二年文覚上人配流の時當社の鳥居の下に
黄金を埋ミ計略して難風の危を免れしより源平盛衰記にみへたり 安元二年六源
牛若丸鬼一法眼と兵書の遺恨ありて我ひし感應を得て勝しより所に武蔵坊
に逢ふなるへし 北林より至徳元年には将軍義満公殿舎を再建し給ふ 今は九月十日
に節分には白朮小餅宝船を 禁裏より 小餅料は天文二十年将軍義輝公の母堂慶寿院より御寄進ありて今に至り参詣の人に施
として其料を賜ふ 此夜諸人群集して 厄難除滅を祈る の神事なりけるとなり
一音寺は天使社の西に隣る 本尊十一面観音は長二尺七寸 弘法大師の作 淳和帝の御宇に
天下大に疫す 天皇万民の為に伊勢春日両宮へ奉幣使を立らる 神託によつて勅
長谷寺に観音をはじめ 弘法大師に勅して造らしめ給ふ 本尊像なり 洛陽観音巡の第二十六番
文徳天皇の御宇天安二年 正利といふ人 新羅国の浮海の時疱瘡を病む 正利當寺の本尊に祈るに
忽ち平癒す 其後今に疱瘡を祈る人此寺に詣ずとなり

壬生寺
本堂

あたごまゐりの
こぶ狂言
むかしより定まる
狂言の数廿五番あり
桶とり　花盗人
紅葉狩　猿
愛宕まゐり　狐法師
からくり　鵜
鞍馬　盲人川渡
節分　花子
猿引　婿入角力
餓鬼責　岩瓶
さいのかう　棒あぞり　鷹鬼坊主
熊坂　羅生門　湯立
あつひの人　男伊達
棒ふり

新住吉社ハ醒井通高辻角にあり禁所より住吉明神を後成に勧請ありしとぞ

荒神社ハ醒井高辻の北にあり文永年中摂州勝尾山より勧請　近隣に清荒神　宗祖の地なり

化粧水ハ西洞院四条の南にあり　いにしへ此所に小野小町の別荘ありしといふ　是より三間斗北に四条通人家の下に流れ西へ流れ西洞院川へ入る溝川あり

藍染川といふ小野小町にまつはるものありけし人あまたをとげて此川に身を入て死せしとぞ故に婚礼の輿入此橋を通らず忌

小松内府重盛別業は室町四条の南西側にあり　一説に大納言公任卿の旧跡ともいふ高橋あり近年まで清水今にあり

恵比須社ハ猪熊通松原北にあり又名所蛭子神之　当社の什物に紀貫之自筆の九字の名号あり十月廿日に…

天道社ハ五条坊門猪熊の角にあり祭所日月の神なり

御太刀松ハ四条猪熊の角人家の裏にあり源義経此松に太刀をかけ東のあり
とぞ堀川の館の封境なれば実ハ御館の松なり

石神社ハ石井筒通二条の南にあり　祭所豊石窓命奇石窓命也古ハ此地中山忠親卿の亭なりし故に中山社と称す

西雀寺ハ四条通大宮の西にあり浄土宗にして本尊阿弥陀仏ハ吉田中将実方朝臣勅をうけて奥州に下りし時に吾妻に赴き陸奥において卒す其霊雀となりて此寺の庭に棲み往主観智法師の庵に来る故に雀塚と称す　此地旧ハ大内裏の勧学院の地なりしとぞ　実方塚寺内にあり

壬生の大念佛ハ中興の
開山圓覚上人よりそ
ぬり毎年三月十四日ゟ
十日十夜本堂におゐて
修行せしむ七日の中
種々の狂言をなして
おろかなる愚蒙の輩に
勝縁を結ばしめ菩
提の道に入れしめん
がための方便
なるべし

摘ゆるれ狂言

壬生寺ハ五条坊門朱雀の東にあり宗旨ハ真言律にて和州招提寺に属す本尊地蔵
菩薩ハ坐像長三尺にして定朝の作也当寺の草創ハ一条院御宇正暦二年にして
開基ハ三井寺の快賢大僧都 姓ハ藤氏にて粟田関白道兼公の支族なり智證大師に随身して天台の奥義を窮む永承十六年十一月十六日寂を
地蔵の尊像彫刻の志願を発し仏工定朝に命して一千日の間に作り終る相好
圓備にして恰生身に向ふが如し此尊像なる人持物の錫杖ハ或慶元日本堂の四方
奇方源くして異香薫じ音楽空に聞へて聖衆来迎の如し午の時斗にやんで漸く晴る
本尊を拝されハ忽然として六輪の錫杖を持し給ふ是よりある夜此錫杖ハ釈尊
伽羅陀山にて延命地蔵経を説給ふ時地中より出現すと告給ふ当寺の最初ハ草堂にて
此本尊を安置す貞弘二年に堂供養ありて小三井寺と号す其後後朱雀院御宇建保
年中に和州前吏平朝臣宗平本尊の利益を蒙りてより堂舎僧坊悉く造営す此時
寺を宝幢三昧院と号す又地蔵院とも称す白河院鳥羽院後白河院順徳院など
も信敬ありて行幸まし世にめでたき縁起に委し中興ハ圓覚上人
大念仏 三月毎日会式 圓覚上人より始る毎年三月十四日より廿四日まで 壇供 毎歳正月

本圀寺
客殿
拝殿
本堂
大黒堂
千佛堂
二王門
祖師堂
番神社
拝殿
経蔵

大光山本圀寺は堀川松原の南にあり法華宗にして一致派なり開基は日蓮上人にて初は相州鎌倉松葉谷に建立ありて法華堂と名づけ一宗最初の精舎なり抑

日蓮上人姓は三国氏（聖武帝の苗裔なり）父は遠州の刺史貫名重実が次男なり母は清原氏なり貞応元年二月十六日午の刻に房州小湊浦に誕生して十二歳にて同国清澄寺に登りて道善を学び十八歳にて落髪し名を蓮長と号し後に自日蓮と改む初指より出て賢くして常に虚空蔵を祈る或夜の夢に老僧来りて手に明星の如くなる宝珠を授けて夫より一を聞て十を悟れりかくて諸宗にわたる南都北嶺にいたり園城に入ては学窓に蛍をあつめ倩法宗の議判を専に散じかくてこれは蔵経を披き諸経中法華最第一の金言にいたり衆生成仏の根元なる事を知て建長五年四月廿八日二十二歳にて朝日にむかひ合掌し始て南無妙法蓮華経の七字を唱清澄寺の南面にて一山の僧其外守護職東條左衛門尉景信等をあつめて法華を演説し論釈の義文をあらはしければ諸宗の僧徒風の木葉の随が如し是一宗流布の濫觴なり弘長元年五月平重時これを妬で伊豆国伊東浦に左遷せりまた或時相州竜口の刑場にて誅せらるべし

敷革の座にのぞみ天へ儀ふかきとなりて震動して太刀取眼くらみ剱段々に折れければ相模守大に驚き死をゆるしまたりて文永八年には佐渡国に流されけるもいつくしく三年ありてれば赦免状とらの浦に至りしより宗派海内に隈なく流布し遂に相模守も貴敬し上人へ文永十一年五月に鎌倉を出て甲州身延山に入て草庵を結び日朗日晁張折て仏に供し秋の夕べに山月を待て経書を照しある時夜は雨の窓にあらはれ八年のひしに郭公なきぬはあやしみそのの窓をうけし免

日蓮上人

後宇多帝の御宇弘安五年十月十三日武蔵国池上にて宗仲が家にて遷化し給ふ　行年六十一歳

鎌倉松葉谷の法華堂を日朗に附属し又日印これに住し日静の時勅願所となる貞和元年光明帝の勅によりて相州鎌倉より京都に上り六條堀川に移る

本堂は法華経を本尊とし　日助僧都一字　立像堂には釈迦仏を安置し

祖師堂　日蓮上人の木像其外日朗日印日静日像の像を安んず

方丈　妙法花院と称す

阜諦石　一名祈願石といふ　鶬鶊曼陀羅　日蓮上人の

佐女牛の井ハ醒井五条の南にあり井筒に銘あり

佐女牛井

元和二年
有楽再建之

足利将軍義政公茶道に寵せられしとこれこの水を愛しのみしところ今ハ用る人もなく草茅の苔深く井筒も埋れかゝりぬれども名をむかしにのこるは須らく李白が讃

石甃冷蒼苔
寒泉湛月明

なれらの懐旧にかよふなるべし

本願寺ハ西六条にあり宗旨ハ親鸞聖人の弘法所なり（聖人の傳ハ末巻草庵ノ植髪影堂の所にあり）當寺ハ草創ハ亀山院御宇文永九年聖人の息女覚信尼公（日野左衛門佐廣綱卿の室なり）勅を蒙て洛東大谷に始て廟堂を建立ス（開山滅後十一年に當り）亀山院勅願所として龍谷山本願寺の號を賜ふ第二代如信上人（開山の嫡孫で善鸞上人の息にして覚信尼の姪）其頃奥州大網郷に居住ス故に覚恵法師（廣綱の子母ハ覚信尼なり）覚如上人大谷の留主職となりまた覚如上人ハ第三世を継で後伏見院正安元年に勅願寺となる論旨を賜る第八代蓮如上人の時宗旨大に繁昌し既開山の在世に超たる山門の衆徒これを妬て寛正六年に當寺を破却す又寺門三井の院後ハ蓮如上人小荷擔し近松寺に寄附し聖人の影像を是に移しまゐらせより蓮如上人ハ小國に經廻し越前吉崎に御堂を営北陸七州を化導し其後文明十一年山州山科郷に影堂を建立し第九代實如上人に紅衣を賜ふ第十代證如上人の時御堂を摂州大坂石山に十一代顕如上人の時二品親王の勅書を賜り御門跡の號を勅許ありて又御堂を紀州鷺の森にうつし遂に天正十九年八月六條堀川に移ると（委くハ信長記拾遺にあり）

本堂ハ開山親鸞聖人自作の影像を安置す（此像ハ開山七十の時影刻しおハし息女覚信尼公へさづけおハしく聖人の滅後遺骨を細）

掛しも漆ふ和し彩色洞を出せり故ニ骨肉佛彩と称ス坐像ふして長ヶ凡ソ八寸餘なし又本堂ハ大谷本願寺のうへ紫宸殿拝領なり御堂造ハ紫宸殿の模形なり堂前の高欄ハ内裏にはし

南ふの脇壇ふハ前住大僧正其外歴代の畫像を安ス餘間ふハ九字十字の名號北ふ安ス寂如上人の筆也 毎年報恩講七昼夜の法會ニハ八幅の絵傳壇上ふかくる 阿弥陀堂 本尊阿弥陀佛立像長ヶ三尺餘ふして春日の作なり脇壇ふハ六高祖聖徳太子法然上人の畫彩色安ス 當御門主法如上人の御讃也

集會所 法會執行の時僧侶あつまる 轉輪藏 一切經を藏む額ハ寂如上人の筆なり 撞鐘堂 舊ハ山城太秦廣隆寺にありて少納言信西入道の銘あり由縁撞鐘の銘ハ信長記拾遺ニ委し 鼓樓 此太鼓ハ大和國西大寺ふありし胴内ふ其由縁を彩む豊臣秀吉の主方ハ坊官下間氏ニありまれ

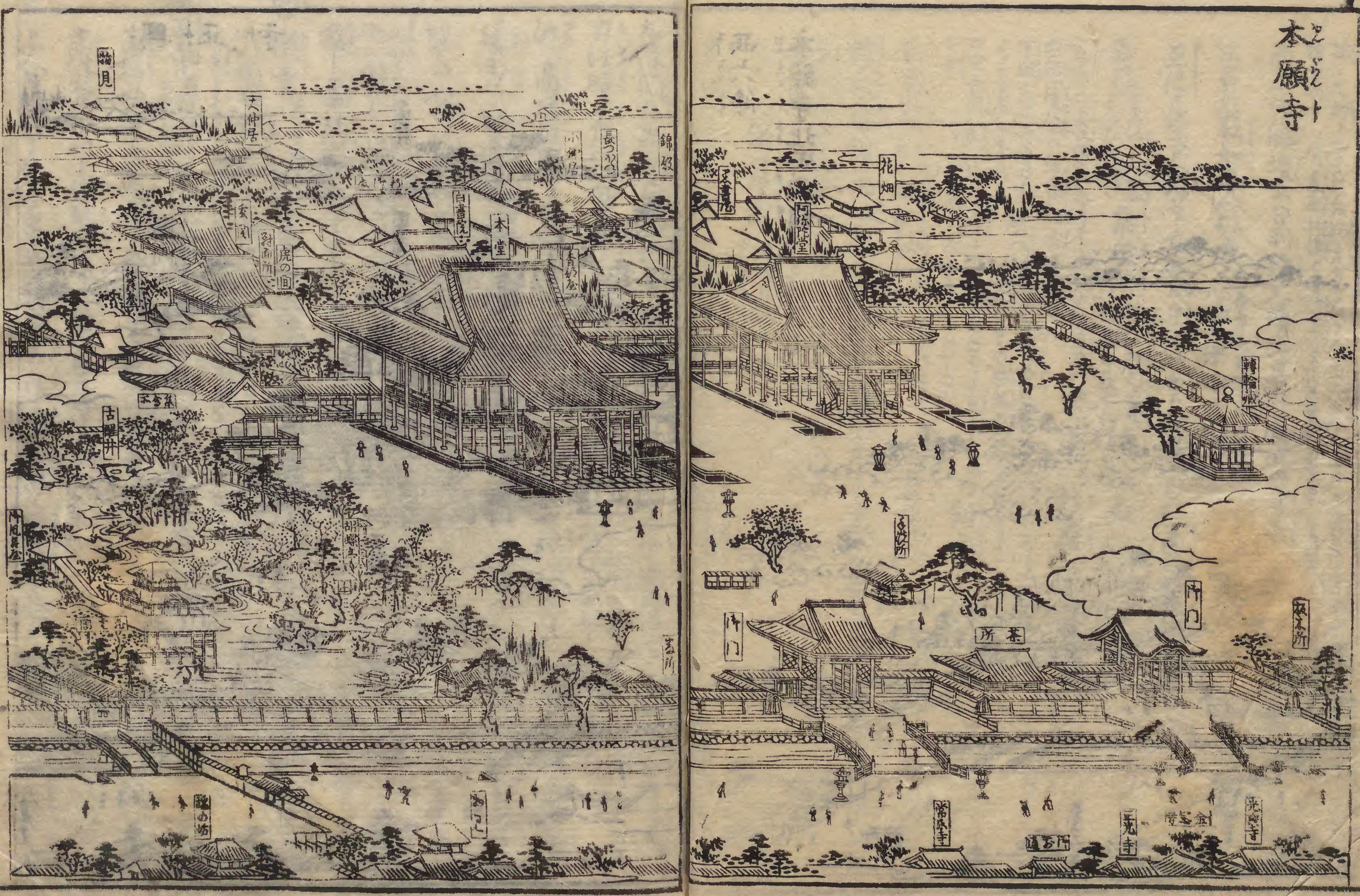
唐門 南の築地長辻ニあり此門ハいつ々へ豊國社ふありしを移りえ 走獸等の彫物莊嚴花美ふして希代の奇觀なり

虎間 四方ふ虎を画く 浪間 天井ニ波を画南の方ニ車よせあり 大廣間 しもつへ絵ハ長谷川等漢の筆なり前ニ能舞臺あり 對面所 聚楽亭よりうつされしを 白書院 小廣間くもの画ハ右ふ同筆なり前ニ能舞臺あり 黒書院 西ハ狩野探幽の筆なり 其外閑雅殿 寄春館 永安館 桃仙館等すれ殿舍高閣多し中ふも繁きゆへ略ス 大仲居 臺所 むかふへ伏見城ふありしをうつされしと入口の唐破風ニ大黒天の像あり二ツの俵を踏む 滴翠園 集會所の東ニありて名區の十勝あり

高樓を飛雲閣と號ス久代秀吉公の時聚楽亭ニありしを此ニうつされしと云

西六條
本願寺北御門前

本願寺（ほんぐわんじ）



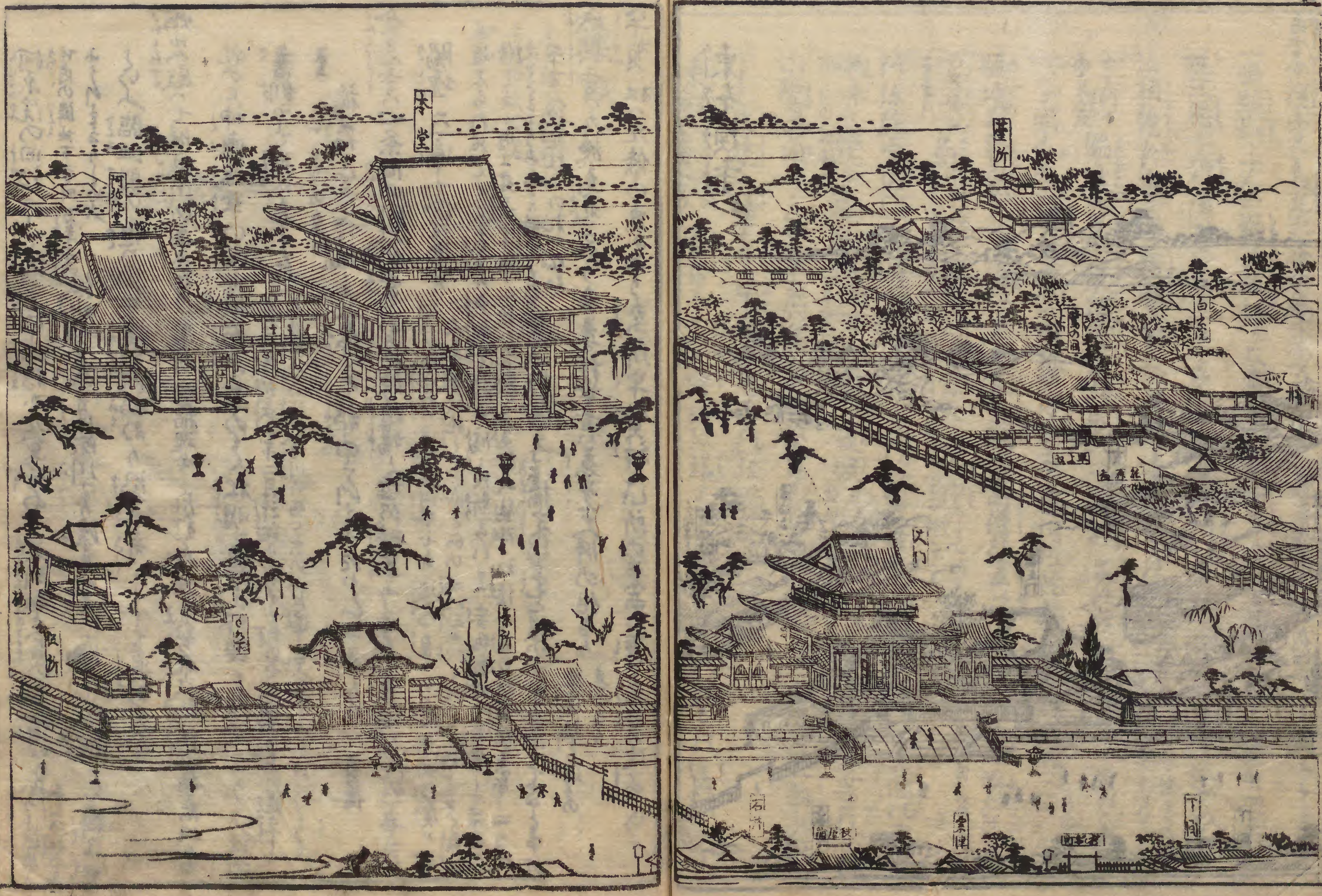
九條関白尚實公の御筆之閣上の画ハ霞に冨士中閣の画ハ三十六哥仙なるよし古法眼元信の筆之下を韶賢殿といふ（飛雲閣の記ハ殿中の東にかゝる十六世湛如上人の御筆にして當御門主法如上人筆を染給ふ）池ハ高樓を巡りて常に船を浮む是を滄浪池といふ龍背橋ハ名を踏花塢あり此邊櫻樹数品あり胡蝶亭の傍にハ夜光石あり嘯月坡ハ池の巡りの坡をいふ黄鶴臺ハ高閣の西にあり浴湯殿あり醒眠泉ハ一名古醒井といふ（洛陽七井の其一なり當新御門主）文如上人の艶雪林にハ梅花多し青蓮榭ハ茶亭にして又澆花亭ともいふ簡文堂碑の銘あり遊し華林園に同うして鳥獸禽魚物のかたち来つて人に親の芳園なり

常樂寺（西本願寺の東にあり）本尊阿弥陀佛ハ春日の作（立像長一尺）開基存覺上人（本願寺三世覚如上人の長子なり）（此人聰明叡智にして顕教を玄智僧正にうけ密教を經恵僧正に学びその奥旨を悟り多く書を著せり當寺初ハ大谷に営み後洛東今小路に遷して常楽臺と称しかく大谷の三世と號す）

興正寺（西本願寺の南に隣る）本尊阿弥陀佛ハ安阿弥の作なり當寺の初ハ宗祖親鸞聖人四十歳の御時山科の郷中に造営し興正寺と名付け高弟真佛上人に附属しぬ其後今比叡所中汁谷にうつし後醍醐帝の御時に佛光寺と改む（委くハ巻首佛光寺の條に）十四世經豪上人本願寺蓮如上人を帰依し佛光寺を出て新に一堂を建て旧号を用て興正寺と称す（十一世顕…）（[illegible]十九年[illegible]）

東本願寺ハ烏丸六条の南にあり宗旨ハ親鸞聖人の弘法にして開山より第十一世顕如上人の嫡子教如上人慶長七年関東の　台命を蒙りて六町四方の寺地を給ハり新に御堂を創しける是東本願寺御門跡と称し宗祖より十二世の血脈を相續す本堂ハ親鸞聖人自作の像を安置す 坐像にして長二尺八寸余なり此原像ハ上別院播磨安楽寺にあり にまして脇壇にハ前住大僧正其外歴代の畫影を安す餘間にハ九字十字の名號を ある事也 かゝる開山聖人の筆なり阿弥陀堂の本尊阿弥陀佛ハ安阿弥の作也 立像にして長三尺斗 脇壇にハ聖徳太子法然上人其外三朝六高僧の畫像を安す大門 本堂の前にあり 階上に阿弥陀佛の坐像を安置す 菊門 大門の北にあり初ハ秀吉公の壮観にして伏見城にありし双の扉に菊花の大門なり 金銀を以て花飾を施して洛中の壮観なり 阿弥陀堂の門 是も伏見城より移されたる 世の人日暮の門とよぶ 撞鐘堂 伏見城中の井戸屋形なりといへり 玄関は武臺摘にして長七間幅三間の一枚板也 寝殿 大廣間と号す 西ハ玉楽の筆也 小寝殿 小廣間といふ 画ハ狩野山雪の筆也 白書院 又黒書院の間小鷺の間あり 集會堂ハ西にあり其外殿閣堂舎等花飾を尽くして他境に勝まさる繁昌にして云ふ畧す

東殿 今ハ石間 屋備あり 台命によりて增地を給ハりて東本願寺の別館とし舊跡所なり


本堂
阿弥陀堂
臺所
白書院
大門
下間

河原院の旧跡にして塩竈の出島に九重塔あり是則融大臣の古墳なりといふ 融公の社なり
境内の隣地下寺町 万年寺 池水ハ東の高瀬川より流き常に滲々たる水をたゝへ獅子口
よりおちるといふ
とら人臨池殿の庭ハ小堀遠州わり風流之奇ところして眞妙なり
炬火殿ハ七條鴨川の西にありし所 倉稲魂命と風神を併せて天和帝の御請により稲荷の末
社の日神輿臨幸の時七條河原にて炬火を照し神輿を迎ふるなり此社の
舊跡にて故に名とする 當社ハ舊弘長元年二月神託によりて七條の西東洞院の東に建立し
其後應仁の乱後鴨川の西七条の北に遷し宝永八年今の地にうつす

家集 いなりの祭日
稲荷山さえ六條より花をそ都のそらにゆたかなるかな 貞徳

金光寺ハ七条間の町にあり當ハあり七條道場と称す時宗にて本尊ハ阿弥陀如来安置
賜壇 二遍上人の像あり 此上人の俗姓ハ伊豫國河野七郎通広が息なり其時別府通廣が妻
二人の妻盤石枕して寝るを見るに髪の毛蛇と化して頭を立て闘ふ
遍久之を見て悟る剣をぬいて悟くに斬られより妄執輪廻を観察して不壽乃
僧となりて時に建長年中之始ハ台数を学び又修行に出て権現の示現を蒙り四句の
文をさとりてより時宗と改め 舊此地ハ佛工法橋定朝が宅之後に上人ここに寺を建立せらるゝ
念仏十万人決定往生の札を弘む
歓喜寺ハ九條烏丸にあり本尊観世音ハ慈覚大師の作なり 其一説に 洛陽観音巡りの
宇賀ハ社ハ九條の東にあり末所 宇賀神とし此所の東西の径を宇賀辻子といふ

東殿

東本願寺別荘
なり俗にハ百間
屋敷といふ

一藪内紹智の家ハ西洞院小路の北にあり 鼻祖剣仲紹智ハ千利休の高弟なりし時

師に向つて曰 秀吉公の寵余人に超て遠き慮あれバ近き害あらんと諫しかども

利休是を不与にして紹智を退る 然バ大徳寺の三玄院に寓居し利休の滅後洛に帰り紫

竹に住し専ら茶道を行ふ 其後鷹司通 今の下長者町なり 新町の西に行てそれより本

願寺御門主良如上人の招にあひて今の地に止住す 故に茶道の下流と称して利休

嫡傳の正流なり 古田織部の数寄屋あり 大坂初陣の時此家に残り出陣す これ織部の茶座敷と號す

芹根水ハ堀川通生酢屋橋の南にあり 近年書家烏石葛辰清水に井筒を入て傍に芹根水の銘をしるし八分字に書して石碑を建

彫刻して又公卿の詩歌を集む 其序文に曰

源融公むかし此邉に閑居し風流を愛し既に今の所の竹林に

ありし所において奥州千賀の塩竈の景をうつし汐汲のありさまを

乗れしより其後貞観の用ひもありしがいにしへの如く清水湧出て

絶せねバおもしろく霊水にありし石檻石碑をうがへて名蹤乃

所以をおこせんとす今時その資へも喜捨して烏石先生流ゝ其碁

ならび経営れより諸君子具に紙善して文藻に屬まうて

實雅公ハ轉法輪殿の所子にて随自意院紀三井猶子にして上の醍醐報

恩院に住持し給ひ大僧都法印なり先生の所動もつれしかバ所作る

ましなり公卿の和歌繁多によりてここに略す

稲荷社 堀川通生酢屋橋通の南にあり 此所稲荷本社の不動堂 稲荷社の南にあり 不動尊ある故本

勧請御旅所の社人田中氏此所に住居す 尊ハ不動堂此所の名とす

道祖神 不動堂の南にあり 此所猿田彦命を祭る 道祖神とも称す 書聖天満宮 道祖神の社内にあり 烏石葛辰碑

古ハ五条新町の西にあり道祖神と称す の銘を建る 篆字ハ國八駒のしるす

稲荷御旅所 道祖神の南二町にあり 稲荷の神輿五座 毎歳三月中の午の日に

神幸なりて四月初の卯日還幸す 古ハ五座の神輿所々に別て御旅所あり

春日森 藏王森 稲荷御旅所の南にあり 寛算石 藏王森の南にあり 此所寛算供奉の文乃

あり由来不詳 遺蹤あり 寛算ハ此処に伏眼ると云ふ あり

其霊雷となり此処に落て岩となる 平家物語に曰 三條院の御因みを御覧ずるに

寛算供奉の霊にや長明無名抄に云 六月廿六日ハ寛算が日なりとぞ

古御旅所 八條坊門金替町の南にあり むかし此所ハ二階堂 観世音像しくて地に在る 福子

稲富といふ今此地者ハ泉涌寺の内 若林寺にあり 此社の鳥居通り 稲荷の旧町なり

吹にとらん也寺も今泉涌寺の内にあり 柴守長者 弘法大師繪紀に曰 空海稲荷に出て

大師の釋迦佛を安置せん これ稲荷と云へるよし 此の尊をのちの名とも

云ふ君ハいかなる人ぞと問ふ ワれハ都八條に住る柴守長者といふものとし 善空海

も都にあらバ佛法弘めん 振法を守り参せんと約し 其後弘仁十四年に東寺の別当の住職

とまうられし二階堂れ柴守長者 後に大臣なりし申されけり 空海いろいろもてなし

にもてなし山おりあれに住ませて 我が佛法を守護しまへて社をつくり自額を書てかかげ

あひたる今の稲荷山なれば二階堂なり

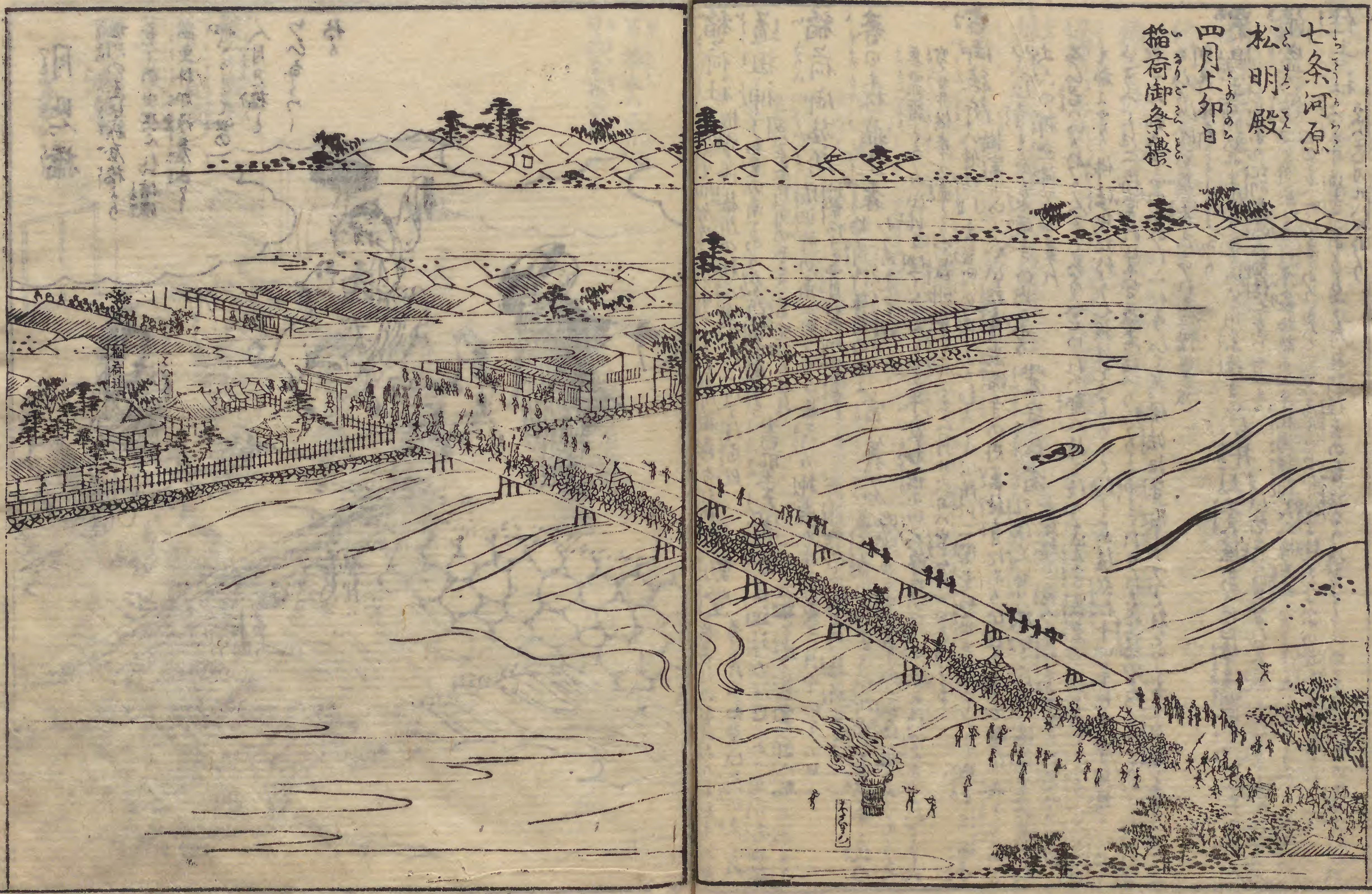
則御旅所としていへり

粟嶋社 堀川の西生酢屋橋通の南宗徳寺の内にあり 紀州粟嶋の勧請なり 毎年六月三日 古井社 大宮八條にあり 俗曰 波逸俱羅生門に金札を建し 此所へ寺へ 又遠して大に稼ぎ故に名とす 實記不詳

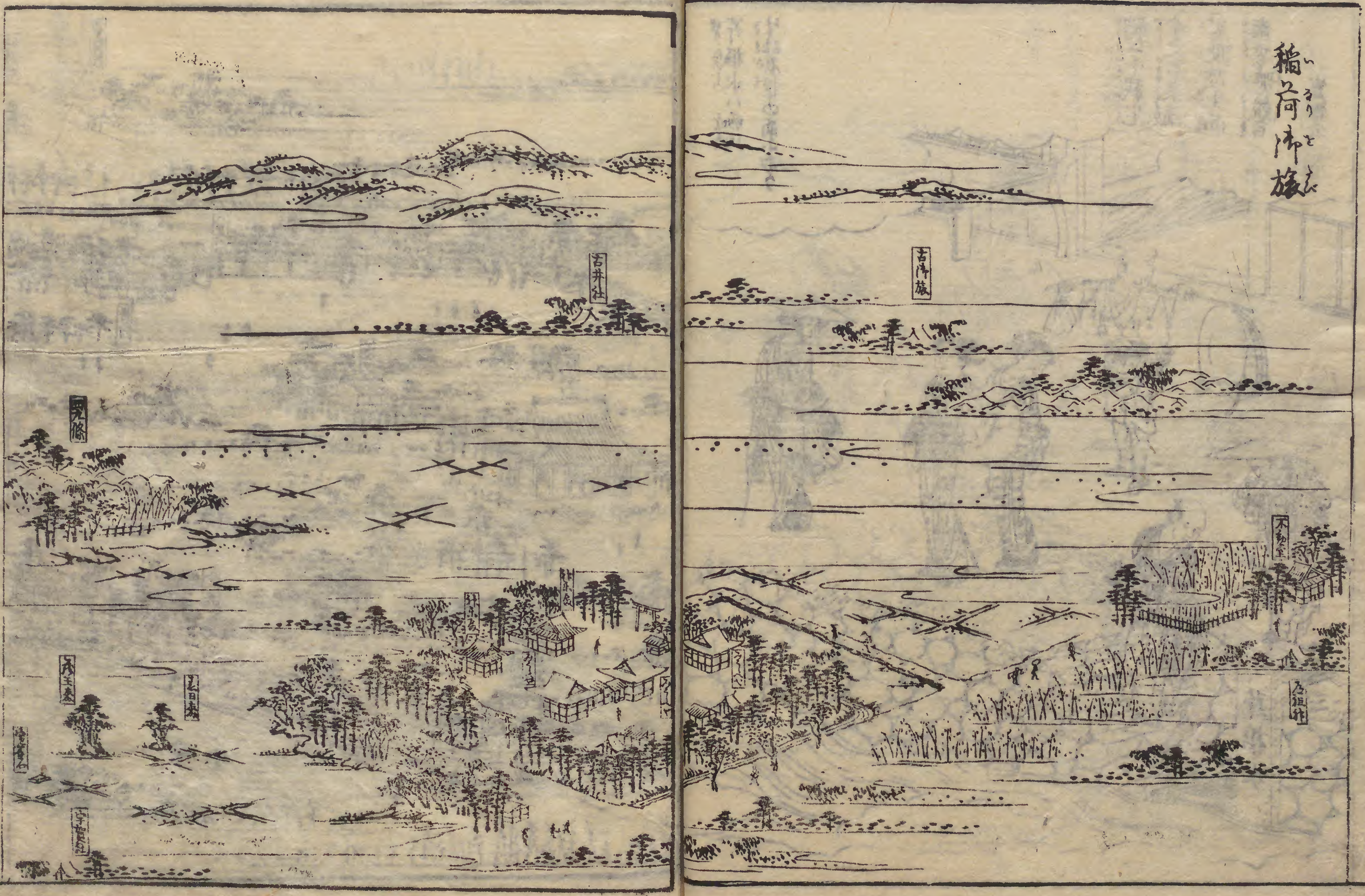
清盛の館 西八條殿とも いふ平家物語に曰 平相國禅門を八條太政大臣と申す 八条より北 坊城より 西の方一町の亭あり 人々そのかくれなかりし 焼亡して大小の棟数五十余に及べり 今の

住吉社 大宮中道寺にあり 此所梅の所 住吉の勧請なり 此辺ハ梅坊城町の東側なり 例年 正月六月廿八日なり

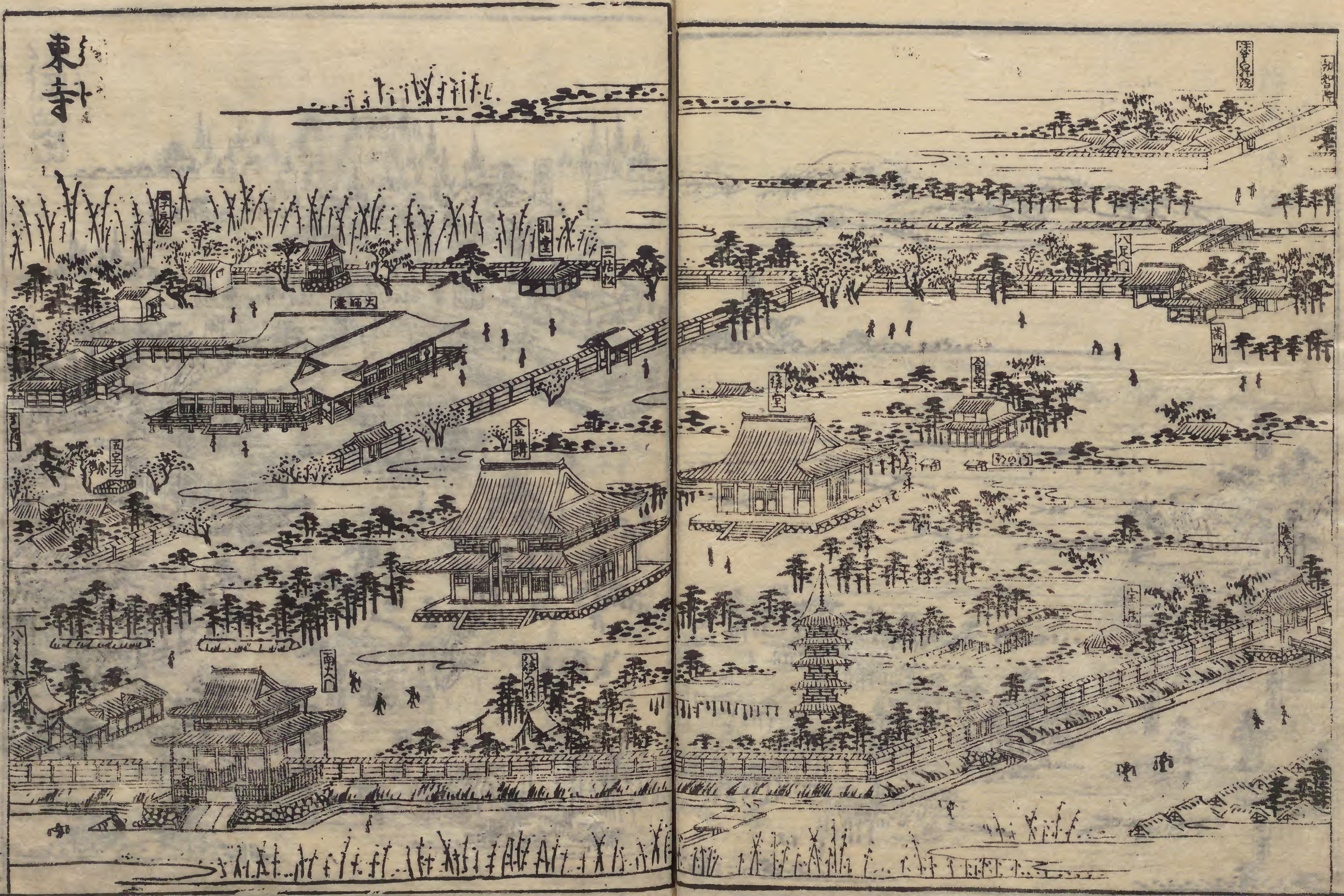
七条河原(しちでうかはら)
松明殿(まつあかしでん)
四月上卯日(うづきうへのうのひ)
稲荷御祭禮(いなりごさいれい)



月見橋
堀川の東出水橋より
南ゲしの西北にあれば信濃
国更科郡姨捨山より
加ゝりしそ世の
人月見橋と
いひならハし
侍り
芹根水ハ堀川
出水橋の南にあり
融公千載宅
今見石泉清
若使陸生品
南零應譲名
寛雅公
芹根水



稲荷御旅(いなりおたび)


東寺
大師堂
八足門
番所
食堂

遍照心院
神廟
五所社
佛殿

八幡山教王護國寺秘密傳法院 東寺又左寺とも號す 大宮の西八條の南にあり眞言宗の
源にして開祖は弘法大師なり 舊此地は大内裏の鴻臚館にして来朝の賓客を饗せし
漢朝の鴻臚館を不空三藏に給ひて精舎と営し其例に准じて弘仁四年定まるを
空海に給ひ右寺を密教に帰す 弘法大師は讃州多度郡屏風浦の産にして
光仁帝寶亀五年に誕じ給ふ 十八歳にして大学に至り志佛経にありて遂に出
家し延暦十四年東大寺の檀にのぼり具足戒をうけ名を空海と改む 霊夢に
よりて和州高市郡久米道場の東塔の下にて大毘盧遮那神變加持経を得
られ文義暁しがたければ延暦廿三年五月に入唐して唐の貞元廿一年二月十一日
青龍寺の恵果阿闍梨に謁しかの経の奥儀眞言秘密を傳へ大同元年十月に
帰朝して傳来の密法を弘むる 嵯峨帝勅ありて内裏において諸宗の名
僧とおのおの空海にむかひて所立の宗義を論ぜさせ給ふに空海の曰我宗には大日神
變の眞言一度阿字を觀ずれば即身成佛をとくと 諸宗一同にこれをあやしみ議論す
さ海こぞりければ帝空海に即身成佛の法を拡めんと勅ありければ則五藏三摩地

觀に入忽ち首より五佛の寶冠を出し身より五色の光明を放ち面貌金色にして毘盧
遮那佛となる 帝は御座をおりてさりあひ諸宗の僧は合掌して地にふしたちまち歸依し論
なりければ宗風日本に弘る 弘仁七年紀州高野山を賜て金剛峯寺を建立し 仁明帝
御宇承和二年三月廿一日六十二歳にして高野山に入定し給ふ 其後延喜廿一年に弘法大師
と諡を宣下しありけり 日本に生死不思議の人三人あり 生ありて死なきは空海 死ありて生のなきは天満神 生も死もなきは人丸なり

金堂 本尊は薬師佛 脇士は日光月光なり 焼失の後 豊臣秀頼公の再建にして東大佛殿の模形なり

講堂 本尊は大日如来 脇壇には金剛菩薩五大尊四天王等を安置す

食堂 本尊は千手千眼観世音 聖寶僧正の作なり 脇士は地藏毘沙門天 毘沙門天は羅城門の楼上にありしを此地に移るはいかにし西寺にあり

夜叉神 いにしへは食堂の門に安置す今礎石あり左右の小堂に雌雄の夜叉神を安置す 大師の作なり

五重塔 四仏を安置す 焼失の後 御當家の再建なり 此塔下より南の方へ傾くされによりて北の方に綱を繋て其傾を直さるる

灌頂院 秘密灌頂の所なり

八幡宮 大師神躰を拝して彫刻し給へる神像なり 當寺の鎮守とす

八嶋社 故に地主の神とす 當寺建立以前の勧請なり

寶藏 大師の法器を藏む 巡りに池あり

瓢箪堀 寶藏の南の池の辺に 瓢箪の形なり

南大門 二階の楼門に金剛力士を安置す 西は湛慶の作 東は運慶の作なり

慶賀門 東の門をいふ

蓮華門 西の門をいふ 大師入定の時この門より出給ふといへり

猫瓦 巽の方の築地の上にあり 此築地造営の時は堀部氏奉行をとしなひ作る

西院開祖弘法大師の影を安置す　法眼康勝の作なり後堂にハ大日不動尊
四天王般若菩薩を安す大師の作也
大黒天　大師の作なり西の院の傍に安す　愛染明王　四天王宝持坊に安す　五寶石　後堂の白砂にあり　一名不動石ともいふ
三鈷松　西の院のまへにあり大師唐土より帰朝のとき秘密教相応の地あらバ此三鈷止るべしとて空中に投上給ふの後此所の松枝に止りたる故に名とす三葉の松なり
松子房松　西の院の乾にあり
樓雲記云　元弘三年五月六日波羅攻落され頽ち船上山へ進給ふ後醍醐天皇則入洛あり播州書写山にて新田義貞より小條高時滅亡のよしを注進す楠正成兵庫にて迎奉る時に勅額によりて東寺へ行幸松子房にて此松のもとに向給ひてよみしを奏しけり
前大僧正頼意よみて奉る詠に
植置しむかしやたそ契りけん人の御葉を松風のこゑ
羅城門の舊跡は朱雀通　今の千本通なり　四塚にあり此門は桓武天皇平安城造営の時初て建られたる大内裏の南面にして外郭の惣門なり　樓上に毘沙門天を安置す　これ伝教大師の作なり
今東寺の鎮守堂にあり
梅城録云　都良香羅城門を過る時に氣霽風梳新柳髪と詠しければ楼上に声ありて氷消浪洗旧苔鬚と付けゝり　これは羅城の鬼の詠しけるとぞ是自然の下の句にて鬼神も感じ給ふなり

萬祥山大通寺遍照心院は八條櫛笥にあり此地は源経基公の殿舎にして天徳五年に薨じ給ふ後此所に霊廟を建六孫王権現と崇奉る其後鎌倉右大臣實朝公の後室二位禅尼大檀越となり真空律師を請して開山とし戒律之論真言等兼学の梵刹となりぬ
佛殿　本尊阿弥陀佛ハ運慶の作なり　本地堂　本尊ハ不動明王ハ興教大師の作也
六孫王社　御當家より造営あり
六孫王社の此所ハ経基公の神霊にして源氏の祖神にして　神廟　本社の後にあり　貞純親王社　本社の巽にあり
社前にハ法便より奉納の石燈籠数々あり　毎年九月十一日神前の神楽あり例あり　弁財天社　長七尺五寸余弘法の作なり　誕生水　源満仲公誕生の時の産湯の水なり
神龍池　放生会あり　社前の池なり
産湯ともいへる洛陽の名水　阿弥陀佛　立像長二尺五寸安阿弥の作にして親鸞聖人の持尊なり
七井の其一つなり
初めハ当寺に持来りて今門内の　寶冠釈迦佛　方丈に安す　實朝公の持念佛　定朝の作なり
宝蔵にあり二月十五日開帳あり
方丈の庭　庭中に廬山の景を摸して絶妙なり
満仲公誕生地　八條通大宮の西にあり　今六孫王の御旅所とす　歓喜森　七条朱雀の東にあり此所ハ歓喜寺院の旧跡なり
福大明神森　壬生通の東櫛笥の北にあり　由来詳ならず　人丸塚　坊城通七条の南にあり　由緒詳ならず

嶋原
出口之
けいせいの
賢なるハ
此柳かな
其角

鴻原傾城町ハ朱雀野にあり此所上古ハ鴻臚舘の地なり中頃ハ観喜寿院の封境にして西口の畠ハ字を堂の口といふ又傾城郭ハ万里小路（今ハ柳馬場なり）二條の南方二町なり其先ハ東山殿（義政公）遊宴の地なり天正十七年原三郎左衛門林又一郎といふ浪人上訴によりて傾城町を免許せられ一の郭をひらきしかり地名を新屋敷と號し又柳の雙樹ありしかバ柳町とも稱じ（今の出口の柳ハ此遺風也）其より十二ヶ年を歴て慶長七年に六條へうつされ今の室町新町西洞院五條橋通の南およそ方弐町の郭之中に小路三通あり是よりて三筋町と號じ（六條通今の魚棚西洞院川にかゝる石橋ハ傾城町の入口にして此所かけ初し之今にあり又数町又条の南西側臨匠の居宅異風なり此所の志ハにして今に存せり）又寛永十八年に今の朱雀野へ移されて嶋原と號るあらハ其頃肥前の嶋原に天草四郎といふもの一揆を起し動乱に及ぶ時此里もうつりかはりし騒しかりしかバ世の人嶋原と異名付しより遂に此所の名とせり

恵敬院

国立公文書館
National Archives of Japan